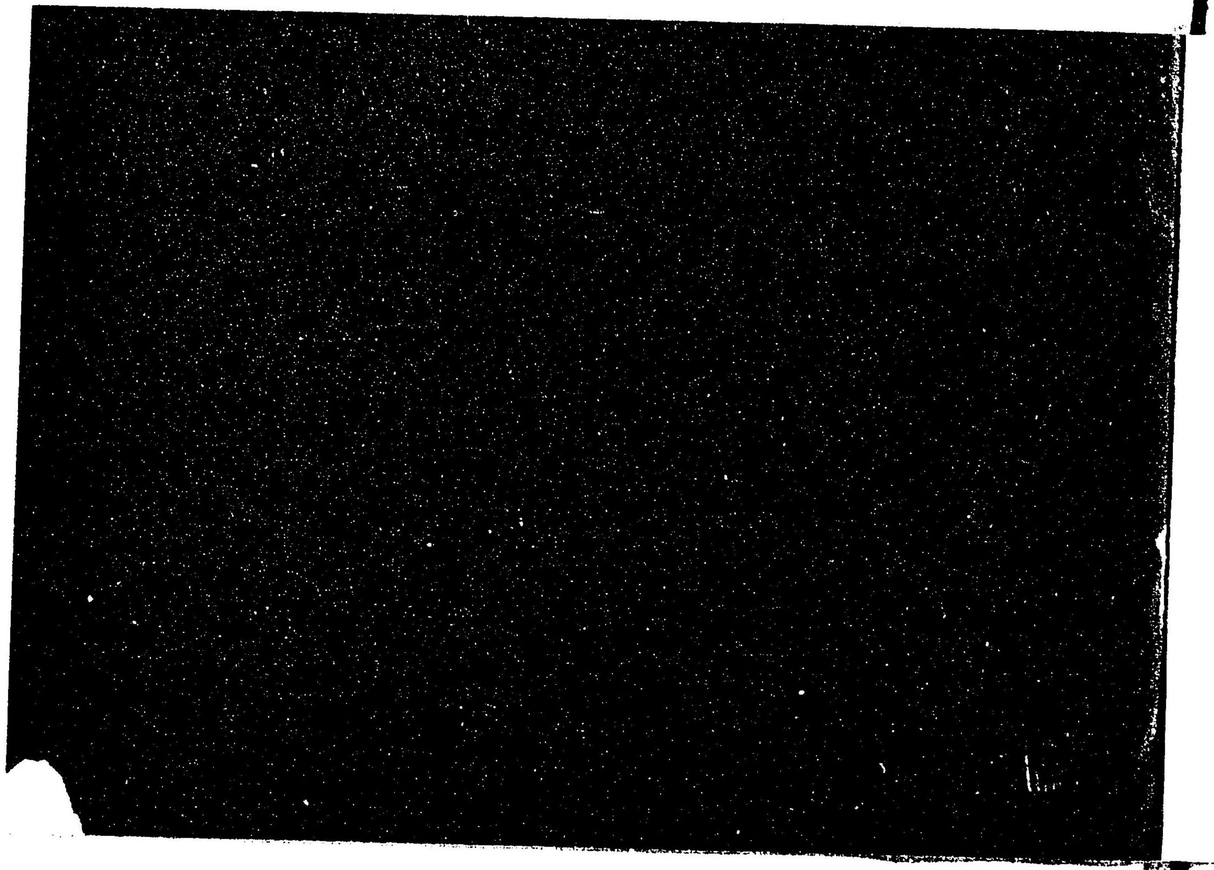
音曲全書
第三編
流行新曲
唱歌

尺八獨習

265
235

流行歌
うた
は
唄



特23
417

序

本書の著者桂華子は余が知友なり。操觚の事に従ふ、然も其傍ら糸竹の技を弄す又甚だ巧を極む、頃日余が旅寓を叩いて曰く尺八の指導書稿漸く成る是れが校閲をせよと、即ち巻を繙くに其指摘する處敢て綿密と云ふにあらざるも其要は捉へて洩らすなく管を執つて是れに試むに音譜明確又た一指加ふべきなし校を了せば更に序文を請ふされを余は元來筆を持つて世に立つものにあらざれば到底巻頭を飾るの具にならずと辞す然らば校閲の辞に

43. 8. 22

て可なりと是れ又た文をなすものにあらず只だ指導簡明音譜明晰の八文字より他に述ふるの能なしと云へば夫れで結構と云はるゝまゝ遂ひに筆を執つて序に易ふる事爾り

明治庚戌の春

浪華の旅寓にて

本書の校閲を了して

梧桐軒安川雲峯しるす

目次

○吹奏法……一
○音階……二
○音譜……三
○音譜記號……四
○調子合せ方……五
○竹調べ……七

流行歌

○芝で生れて……七
○らつぱぶし……八
○ちやら〳〵ぶし……九
○さのさぶし……一〇
○博多ぶし……一〇
○いそぶし……一二
○程のよさぶし……一三
○十日戎……一四
○高い山……一六
○浮世ぶし……一六
○せつせぶし……一七
○しんからぶし……一八
○ひや〳〵ぶし……一九
○推量ぶし……一九
○四季……二〇
○琉球ぶし……二一

曲俗

○ゑんかいなぶし……二三
○大津繪……二五
○わさゝとも……二五
○伊豫ぶし……二六
○玉川……二七
○夕やれ……二八
○御所車……二九
○我がもの……三三
○かつぱれ……三五
○因州いなば……三五

唱歌

○君が代……九九
○紀元節……九九
○金剛石……一〇〇
○皇御國……一〇一
○數へ歌……一〇一
○舟遊び……一〇二
○四千餘萬……一〇三

明清樂

○九連環……一〇四
○算命曲……一〇四
○四季曲……一〇四
○未梨花……一〇五
○砂窓……一〇六
○萬々花……一〇六
○沒波流水……一〇七
○梅花流水……一〇八
○松山流水……一〇九

目次終

○梅にも春……三七
○沖の大船……三九
○木津川……四〇
○落し文……四二
○春さめ……四四
○黒かみ……四六
○松づくし……四九
○京の四季……五一
○芦かり……五四
○鶴の聲……五六
○袖香爐……五八
○雪……六〇
○こすのと……六二
○八千代獅子……六九
○通ふ神……七四
○七草……七六

箏曲

○殘月……八〇
○千鳥……九〇

○尺八

尺八は西洋樂器の如く器械の裝置によつて發音せしひるものにあらずして奏者が練磨の結果美妙の發音を得るものなれば最初より自由に歌曲を吹奏し得ざるは今更云ふ迄もなし、故に歌曲を奏する以前に先づ音階の練習より初むべし

○吹奏法

尺八を吹奏するには姿勢を正しくし呼吸を深く丹田より出だす事に具へ、其持ち方は左手を上に右手を下になし右手の無名指にて下の穴を、食指にて下より二番目の穴を押へ中指は其中間に拇指は裏面に當て、中指と拇指を以て樂器を支持し、左手の無名指にて下より三番目の穴を、食指にて四番目（即ち前面の一番上の穴）を押へ中指は其中間に置き拇指を以て裏面の穴を押ふ、又呼吸の吹奏は上部の端にある歌口に下唇を堅く當て竹根を五十度乃至六十度の角度に前方へ出し頤を張りて靜かに息を吹き込むべし、斯くの如くして吹奏する際、内部に水氣の溜るものなれば布切れの一端に紐を付けたるものを以て拭ひ去る樣注意せざれば發音に變化を來すなり

○音階

尺八は前項記載せし如く奏者の呼吸によつて發音せしむるものなれば西洋樂器の如く音階に一定の典型は無きも強て求むれば左の如し

●穴を閉きし印　○穴を開きし印　◐半開

裏穴	四	三	二	一	
●	○	○	●	●	1……ド
●	●	●	●	●	2……レ
●	●	●	●	○	3……ミ
●	●	●	◐	○	4……フヲ
●	●	●	○	○	5……ソル
●	●	○	○	○	6……ラ
●	◐	○	○	○	7……シ

上部

右はたゞ其一例を擧げしに過ぎず、其他換へ指、半音等諸種あれども初學者には復雜の嫌あるのみならず漸次熟達するにつれ自得するものなれば是れ等を省略し左に速成的ならん事を期して簡明に說く

○音譜

發音階は前述の如くなるも指の使用法順を追ばされば初學者には解し難からんを以て本書所載の音譜に就て左の符號を附す、最初先づ此の符號と發音を練習せし後曲譜の演奏を行ふべし

(裏穴)	四	三	二	一	記號
●	●	●	●	●	イ（皆閉シタル音）
●	●	●	●	○	ロ（下一穴開ク）
●	●	●	○	○	ハ（下二穴開ク）
●	●	○	○	○	ニ（下三穴開ク）
●	○	○	●	●	ホ（三四、穴ヲ開ク）
○	○	○	●	●	ヘ（三四五穴開ク）
○	○	●	●	○	ト（四五穴開ク）
○	○	●	○	●	チ（二、四、五穴開ク）
●	●	○	●	○	リ（一三穴開ク）

普通最も使用すべきは右の九種とす、尙發音に高低を生せし

ひるは(俗に云ふ甲乙)唇を締めて吹けば高き音の發し緩むれば低き音となる

○音譜符號

一高音　譜中高音(即ちカンの音)を發せしひる符號として前述音譜符號の上に黒點●を置く

一低音　低音には記號を置かす

一拍子　譜の傍に何等符號無きは其符號を吹くに掛け時計の振子一振りする間の時間とし「――」線を符號の右側に引ける　符號なきもの、半分の時間「―」二線引けるは一線引けるもの、半分の時間を符號の右の下に小さき符號を以て記るせるは大きなる符號に倘ほ半分の長さを引き符號の下に一線を引けるは其符號の倍の長さを引く時間を吹く

一休止　符號の中に○を書きたるは一符號吹く間の時間を休み、是れに一線、二線、小丸等を附したるは普通の符號と同じ割分の時間を以て休むべし

一連接　曲譜中同種の記號續づく時(例へはイイイ或はロロロ等)は其記號の開閉せる穴の内下より致へ開きし穴の上穴(例へはイの記號にて連接の譜あらば一の穴、ホの記號にて連接あらば五の穴)を輕るく開閉すべし、尤もヘトチ記號の如く上部の穴の開き居る場合は開きし穴の上部を開閉せばよし

○調子の合せ方

三味線と合奏の場合調子の合せ方は左の如し

三味線　一の糸と尺八のイ
本調子　二の糸と同ハ
同　三の糸と同イ
同　一の糸と同イ
二上り　二の糸と同ニ
同　三の糸と同イ
同　一の糸と同イ
三下り　二の糸と同ハ
同　三の糸と同ホ

其他は實習の上會得すべし

凡例

一　凡そ音樂の演奏は其種の何たるを問はず何れも一種の技術なるは今更云ふ迄も無けれど殊に尺八にあつて最も棹を抜きしものと云ふべく從つて其發音の如きも諸種西洋樂器の如く器械的の組織なければ是れを奏するには先づ發音の練磨より初むるを要す、然も其發音の音階律は姿者の技量によつて別るゝものなれば筆を以て記るすに頗る困難なるもの抔なからず、是れ等を明細に述べんには反つて復雜に渉り初學者をして迷はしむるに至る恐れあれば本書は努めて簡明を期せん爲め普請等の如きもたゞ其要をのみ摘んで筆を避くることとしたり、故に初學者は是れによつて其大体を知得せば他は自然的に會得せらるべし、否會得するに至らん

尺八獨稽古

野田桂華編
梧桐軒雲峰校閲

○竹調べ

イ、ハ、イ、ホ ヘ ホ ロ ロ、ハ、ハ、ニ、ハ ロ
ロ、イ ホ ヘ、イ ○ ホ ヘ ー、ホ ヘ、ホ ヘ ハ
ロ イ イ ホ ニ ー ハ ー ロ、イ

流行歌

○芝で生れて

ロ ニ ロ イ ロ、ロ ニ ロ イ ロ、ハ ロ ハ ロ ハ ○
ロ ハ ロ、ハ ニ ー ハ ロ、ホ ハ ロ ハ ロ ホ ヘ
ハ ニ ー ホ、ハ ロ ハ、ホ ホ ハ、ハ ロ ハ ー ハ

ロロニ、ロホニー八ニロニロイロ。

○芝で生れて神田で育ち、今じや火消しのアノまとひ持ち。

○京で生れて大阪で育ち、今じや新地でアノ左り褄。

○垣にからんだ朝顔さへも、露をたのみにアノ花さかす。

○かねの中でも入らない金は、かね〳〵氣兼にアノ明けの鐘

○主の心は張子の虎よ、何をいふてもアノ首をふる。

○らつはぶし

ホホホホ、ホホホホ、イホニホイ、ハハーニ、ホホヘホニホニロハ、ロロロハニニニハニハロイホー、ローイーロホホニホロハハハハ、ホホホホホホホ。

○倒れし兵士を抱き起こし耳に口あて名を問へばにつこと笑ふて目に涙、萬歳唱ふも口の内、

羽織たゝんで此方の人、悋氣で云ふのじやなけねども、獨りでさした傘なれば、片袖濡よふ筈がない。

片袖濡れても悋氣すな、昨夕のお連はおとこ連れ聞けばお前の元なじみ、云はゞ悋氣はこちから。

○ちやら〳〵ぶし

ホホホホホホイホニニニホハー、ロロロハニーホニ、ハハハニロー、ホホホホ、ハハハニ、ハハハニハー、ハハニニホホイホ、ハハハニハー○イロイホニホホホ、ホヘホニハ、ニニニ、イロイホニ、ホヘホニハ、ロニニハ。

○自轉車

チリリンリンと駈け來るは、時間借りした自轉車の、曲乘如何だと自慢氣に、大の字形の自轉車通、あつちい行ては危險よ、こつちい行ちやいけないよ、あー危險と言てる間にそれ落こつた。

○同替歌

厨子の濱邊の波靜か、二人手に手を取り交し、浪子は武雄にすがり付き、熱き涙をほろ〳〵と、たとへ妾しが死んだとて永くあなたの妻ですよ、何卒早く歸つて頂戴な。

○さのさぶし

ロハニホハーロハ、ニニハロイロ
イロハニロイホー、ロハロハイー
ロイホ、ニハニーニハ、ニホニホホ
イホ、ニホーニホーニ、ロローハニ
ホイホホニホニハロー、イロハ、ロハ
ホ、ホイロロハニホハニー。

○なるも花、咲くも花だよ今日此頃は、フトした事から人の花、と言ふて未練はなけれをも、逢ふていさゝか言ひたい事がある、さのさ。

○迷兒の〳〵三太郎さん、鉦や太鼓でドンガラのガンチキチン、叩いて歩いて逢れるものなれば、鉦や太鼓でドンガラのガンチキチンと叩いて歩いて逢ひたい人がある、さのさ。

○はかたぶし

ホーヘホニーハハニーハハニハハー

ニ、ニホーヘホニハーニーハハニハハ
ニ○ホヘーニーハーロ、イイローハ
ニーハーロ、イイハ、ハハハロイイ
ロイロハイホニーニーニホイー、ロ
ハロイーイー、ロイーニホーヘホニ
、ホニローハーロイ、ニニーホイ
ロハロイイーイー、イイホロー八、ニ
ホニホーイ、ロハー二、ホイ、ヘホ
ニーハハニーハハニ。

○博多、帶〆め、筑前しぼり、筑前はかたの、帶しめて、歩む……すがたが、……アヤドッコイショ柳……腰、お月さんがちよいとでて、松の影から、ヘイ……今晩は。

○今鳴る鐘は、芝か上野か、アヤヤ淺草か、又もや鳴るのが泉岳寺、四十七士の供養の……アヤヤドッコイショ……鐘由良之助が九ツ五分で、御直打つ。

○いそぶし

ロハバーロハニハーロハニホニロー
ハーロハイーホイー、ホイロー、ロ
ハハハハハローロハロイイー、イハ
ホイ、ハニハーロハニホニハ、ロハ
ロハイホイホーホイホホ、イホホイホ
イホイホ、イホホ、イホホ、イホホ、イホホ
イホホ イホホ イホホ イホホ イホホ
イホホ イホホ イホホ イホホ イホホ
イホホ イホホ イホホ イホホ イホホ
イホホイ、ホイイーロハハーロハニホニ
ロハロハニイホイー

○山で赤いものは椿につゝぢ、サイショヲー咲いてからまる藤の花咲いてヲーからまるイソ藤の花、テヤ〳〵〳〵〳〵いさゝかりん〳〵すかれちやどん〳〵、娘の性なら島田で來い、乳母の性なら瘤付で來い、花魁の性ならお職で來い新造の性ならお辭儀でこいお父さんも御心配、お母さんも御心配、共に妾しもイソ御心配、

○磯で名所はおはらひ樣よ、サイショヲー、松が見へますほの〳〵と、松がヲー見へますイソほの〳〵と、テンヤ〳〵〳〵〳〵、いさゝかりん〳〵、すかれちやドン〳〵情夫の性なら二時過に來い、遣母の性なら憎まれて來い、野呂間の性なら鼻毛で來い、夫でも足りなきやよだれで來い、お金は取られる花魁にふられる、そこで旦那はイソ泣き出した、テヤ〳〵〳〵〳〵。

○程のよさぶし

ハホホホホー、ハホホホホー、ニホ
ホヘホニハロハロハニーハハロイ
、ハハロロイホニハ、ロハ、ハニハ
ーホロホホイーホ、ハホホホホー、

ハホホホローホニニニハロー

○をつにからんだ垣根の糸瓜ぶらりと下つた程のよさ

○私しのお父さん紙屑買で朝から晩まで紙屑無いかね

○十日戎

イーイロハハハロハホニハロイー

イロイホニハニニニイハロハハロイ

、ロハロハニホイホイロロロイ、イ

イホホニヨニハニニニニイー、ホニ

ハ、ロロロハニニハロ、イホヘホニ

ホハー、

○十日戎の賣物ははせ袋に取鉢銀かます、小判に金箱立烏帽子、ゆでばちさいづち束ねのし、お笹をかたげて千鳥足

○金來節

ハハハハホイイハホイイー、ホヘホ

ニハロイ、ロイホハイニハ、ニニハ

ハロイホイー、ハロイロハニハニハ

ロイホイーイ、ハロイ、ハロイ、ハ

ロイ、ハロイ、ニーホホニホニホ、

イイイイー、ロハハイ、ロハニハ、

ニニニ、ハロイホ、イイイー、ロロ

ロハロイホ、イイイイー、ハハハ

ハホイイハホイイイー。

摺鉢を伏せて眺むりや三國一の、味噌を駿河の富士の山、

キビスカン〳〵、イガイドンス、キンギョクレンスノ、スクチンポ、スッチャンマン〳〵カイノ、オッペラポーノ、キンライ〳〵、アホラシィヤオマヘカンカ、カミサンイテ、ヤオマヘンカ。

熊谷が組で押ゆりや太夫も共に、殺生はむる一の谷、きびすきん〳〵、いがいぜんす、きんぎよくれんすの、すくねんぼ、すつちやんまん〳〵かいの、おつべらぼーの、きんらい〳〵、あほらしいやおまへんか、かみさんいてゝやおまへんか。

○高い山

ホイーイホ、イーホニ、ハーニホイ
、イロイーホホ、イーホホイ、イーイホ、イーホニハーニホイ、ロイホーニニヒハ、ニニニハ、ニロロハ、ホニハ、ニロロハ。

○高い山から谷底見れば　瓜や茄子の花咲り

○おばゞ何處へ行きや三升樽さげて嫁の在所へ孫抱きに

○浮世ぶし

ロイハハハホイ、ホイイーロイホーイホニーハハ、ハロロハハロハニニホニニニーイ、ハハロハロイホホホニホヘホイ、ローロイ、ロー

ハーニーホイ、ロイロハハハホイ
ロイロハハハホイ

○妻しや何でもかうでも、あの人ばかりは、呆らめられぬ、
じやによつてに讃岐の金比羅さんでも願掛けしまやうか。

○床の間の花生けを、見るにつけてもたしなましやんせ「あやめ蒿蒲やかきつばた」根は無くとも水さへ通へば、チヨツコラチヨット花が咲く。

○呼びにやつても出來ない時には、籾にやなりたしひかつきやするし、貰はいでもよいと云ふのはひつきよ其場の貧情しみ。

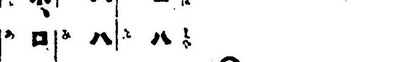
○熊谷さんと敦盛さんと組打したのは何處ぢやといへば十の九の八の七の六の五の四の三の二の一の谷。

○せつせぶし

ホヘホヘホニハニ、ニホヘホニハニニーハロイ、ハハロロハホニハニニニハロイ、ロロハーロイイイイ、ロロハーロイイイイ。

○よその畑にちよいと鍬入れて、またもや苦勞のさつこらさのさ、種を蒔くせつせつせ〳〵〳〵

○しんからぶし



○今宵忍ぶたら簀巻て笠被て忍ばんせ、人が咎めたら竹の子堀じやと抜けさんせ、お母さんに頼んで暇もろて、出て来りやしんから真から〳〵〳〵可愛い、薩摩女郎衆と奈良の大佛餅や、たべりやおいし〳〵。

○ひや〳〵ぶし

○通はしやんせ〳〵、滅法やたらに通はしやんせ、道に汽車あり、人力汽船あり、百里千里は何のその、テモマア便利な浮世じやねへ

○推量ぶし

ハ、ハロニニハハロイロハニホー
ニホイ、ハロハ、ロハニーハーロイ
、ハロ、イーロハーホホーニハ、ハ
ハハニホーニホイイイニホ、ロイ、
ロハニー、ハハニー、イホイイーロ
イローニロハ、ニニハーロハハ

○鯰エーアヅヤ推量々々、誑して權妻となれば、チヨイトさのよやさの、又もコラシヨ、地震でヅツ元の猫、よひやさあの、よいとさ、れいとアヅヤサこりやさ、さーとせセノエ、アヅヤ推量〻々。

○四季

ロハハ、ニホニハ、ロハハハハニハ
ロロハロイーホイローイ、ロハロ
イホ、ロイロホーニハ、ハハニ、ホ
ホニホ、イイイニホ、ロイロロイホ
イロハロハニハイロハロハハ、イ
ロハ。

○春は嬉しや二人ころんで花見の酒、庭のさくらにおぼろ月夫を邪魔する雨と風、鳥渡散して又た咲す、エーセ。

○夏は嬉しや二人ころんで涼みの舟、風が悋氣ですだれ巻く戀の瀬川に棹たゝぬ、鳥渡浮名を流します、エーセ。

○琉球ぶし

ホイイー、ホイロハロイー、ロイホ
ニホイーロイホニハー、ホイーイ、
ロイホニハ、ロハニニロハ、ホイロ
ロロイホニ、イホニハニホイロイ、
ロ、ロ。

○琉球へおぢやるなら、わらじはいてをじやれ、琉球は石原小石原したりやよめ〳〵しんによた〳〵してがんがん

○琉球と鹿兒島は地つゝきならば遇ふて話しをして見たい、したりやよめ〳〵しんによた〳〵してがん〳〵

俗曲

○ゑんかいなおし

ニホーニホー、ハニーハロニホーホ
イーホニハハニハロイロー、イロー
イーローハ、ニホーイーロー、ロハ
ロイ、ロイニ、ロハロイ、ニホイホ
ニ、ニイホイニハロロハローイニ
ホホイローイホイニーハーニホ。

○春のゆふべの手枕に、しつぱりと降る軒の雨、ぬれて綻ぶ山ざくら、花が取持つ縁かいナ。

○夏のすゞみは両國の、出舟入舟屋形舟、上る流星はしくだり、玉屋が取持つ縁かいナ。

○秋の夜ながの床の内、痴話が高とて脊と脊、晴れてさし込む玻璃窓、月が取持つ縁かいナ。

○冬のながめは九段阪、はなしも積る雪見客、ころぶ愛悟の銀世界金がとり持つ縁かいナ。

○太津絃

ロイロイホニホイロイホニホイイー
ホイホイ、ホイイロハハニハロハニ
ロハロイロホホへホ、ニホホイホニ
ホホニハーニホニホイホホー、へ
ホ、イホへホハ、ホイロロハーロハ
ーロハハロハニハハニハホイロ、ハ
ニハローイ、ロホーイホニーホ、へ
ホハ、ニローハロハニーホイイホ
ロハーロイーロハホロイロホニハ
ロハニ、ホイーホニハロニーハー
ロイーローイイロイホロ、ロハニホ

ー ハ ロ ロ ハ ー ニ ハ ハ ー、ホ ニ ー ホ ヘ
ホ ハ、ホ イ イ ロ、ロ ハ ニ ハ ロ イ ー ロ
ハ ホ ヘ ホ、ロ イ ホ ハ ー ロ イ ー ロ ハ ホ
ヘ ホ、ニ ホ ホ ー ニ ニ ホ ニ、ロ ハ ハ ロ
ハ ロ イ ホ、ロ イ ロ ハ、ロ ハ ハ、ニ ホ
ハ ハ ロ、ロ ロ ハ ロ ロ ー イ ホ、ニ ニ ハ
ニ ー ホ イ ハ ハ ロ イ、ホ ヘ ホ ニ ホ ハ ハ
ニ ロ ハ ー、ロ イ ロ イ ホ ニ ホ イ ロ イ ホ
ニ ホ イ イ ー ホ ヘ ホ イ。

○大阪を立退て私しが姿が目にたゝば堪れかこに身をやつし
奈良のはたごや三輪のちやや、はつかあまりに四十餘両つ
かいはたして二歩のこる、金より大事な忠兵衛さん、とが
にんに、ならさんしたのも皆んな私しゆへ、さぞやおはら
も立ちませうが是れもいんねんづくぢやとあきらめくだ
さんせ

○あさくとも清き流れのかきつばた、飛ん正行きのぬれつ
ばめ覗いて見たか編笠の顔は見たいは無いかいな。
○今朝もまた、ぬいだ羽織のほころびをいやな妾しにぬわす
より、すいたお方にぬはさよい

ハ ハ ハ ハ ハ、ロ ハ ニ ー ハ ハ イ ホ ヘ ホ
ハ ー ロ ロ ロ ー、イ ホ ヘ ホ ハ ハ ロ ハ ハ
ハ、ロ ハ ハ ハ ハ ニ ー ホ ハ ー ロ イ ー
ホ、ホ ヘ ー ホ イ ロ イ イ ー イ、イ ー
ロ ー ホ ホ ー ヘ ニ ー、ハ ニ ホ ニ ー ロ、
ニ ハ ニ ハ ニ ホ ニ ニ、ニ ニ ニ ー ニ、
ニ ハ ロ、ハ ニ ハ ニ ハ ロ イ、ホ ホ イ ー
ハ イ ホ ハ ー ニ、ロ イ ー ホ、ヘ ー ホ ロ
イ ロ イ ロ ー。

○伊豫ぶし

ロイホヘーホイホイイハ、ホイホヘ
ーホイ、ニホーニホイホヘーホイ、
ロロイホヘーホニ、ホニホハロイ、
ニハロハロイ、ホホーホニハニホー
ホイイー、ロハロイロイホイ、ホヘー
ホニハニハロハニハ、ニーニホヘー
ホニーニ、ハニ、ロハイハニホーニ
ハハーニハハロロハロイホホロイホ
ニーニホーハホホイホヘー、ロハロ
イハロイホハ、イロロロハハロハニ
ニニニハー、ロローハニハー二、ホ

ヘーホニハニハロー ロイ、ハハロロ
ハハロイホロイホニホイーロー ホイ。

○堺住吉それ橋わたる、奥の天神五大力、おもと社や信心穴から大神宮さんを伏しをがみ誕生石には石を積む赤まへたりが出てまねく、ころ〳〵せんへに竹馬や、麥わら細工につなぎ貝買はしやんせ

○玉　川

ホイーロハイーニホニハーロハハロ
ハハハイイイーホヘイ、ホイーロハ
イニホニハーロイロイハーニーハ、
ハーハニロハロニーハハロハホイ、
ホニホニニニハニーニ、ハニーホー
ヘホニハハイロローハニニハロロヘホ
ホーイーローホイーイーイ、ニハロ

イハロイローイイイイーイイロイ
ホヘホニハ、ローハニーハロハニー
ハニロホロホニハーロイローイニー
ホニロハハハ

○玉川の水にさらせし雪の肌、積る口舌の其うちに、解し良田のもつれ髪、思ひ出さずに忘れずに、又來る春を待つぞへ

○夕ぐれ

ロハハハーニーハニイー、イイーヘ
ホニホーニハホーイ、ロニロホイホ
ニホイホヘホイイハホーイイーロ
イイイ、イーイイローホニ、ハニ、
ヘホーハニホーニー、イハハイイホ
イハーハハハハーハハハーハニーハ

ーハロハニハハーロホイーロハハハ
ホニニ○ハロハハロイ、ホーニホ
イロロニーイホホイロハーロイホ
ニハ、ロハハ、ロハーホニハハロホ
イロニーロイイーホイイイ、イーホ
ーホニ、イーホホ○ホニホハハー
イホ、ニハロロイロハニホニホイハ
ーロロロハロハイホニハロイハハハ。

○夕ぐれに眺め見あかぬ隅田川、月に風情の待乳山、帆かげた艘が見ゆるぞへ、アレ鳥が啼く鳥の名の、都に名所があるわいな。

○御所車

ニホーニハハニホハロイホロハハハ
ーロハーハーハニーハロニイーホイ

ロニハーロー　ホホロハーロイホニホ
ニホロイホヘーホニニーハニホヘホ
ニハハローロイハニロハーロイホイ
ーホニホホホ、ロイホニーホイロハ
ーロイイイイローロイホヘーホニ
ニ、ニホヘーホニハロイイ、ロロハ
ロハーロイホニホホハホニハロハ
ーロハーハ、ハハニハロロハロイイロ
イロロホイイイイホホニホホハロ
イホニハロハーロイイイロロロハ
ハハニホホホニハーハハホニハーハ
ハハロハニホニハハロイイ、

ロイーロホロロロハーロホロハ
ロハーロイホロロハーロイイイニ
ハロハーロイホホホニハロロロハニ
ーホニハニニニニホーニハハロロ
ホニハ、ロイイイーイ、ホイーイー
ロハローロハーロイイーイ、ホニニ
ホイロイホニニホニハニホイロホニ
ホヘーホニハロハーロイイ、ハ、ロ
ハーニハーロローホ、ニーホ。

○香にまよふ、梅が軒端の匂ひ鳥、花にあふせをまつとしの
明けて嬉しき懸想文、開く初音のはづかしくまたとけか
ぬる澤水、雪に思ひを深草の百夜も通ふ戀のやみ、君が情
けをかりねのとこよ、枕かたしくよもすがら

○我がもの

ロハーニホヘーイロハニハニニーハ
わがものとおもえ

ニーロローイホヘーホイハロイイイ
ばかるきかさのゆ

ーハロロロロハニハーハホニーホハ
きこいの

ニーハロロハニハニイホヘーホイホ
をもにをか

ヘーホニロハイホヘーホニハーハ、
たにかけ

ホヘーホイイイニニイニニロハロハ

ハハイイ・ニホイーホヘーホイ、ホニ
いも

ニホイホヘロハーハホイホヘーホイ
がりゆけば

ホイ、ホイロハニハーロイハイイイ
よゆのよに

イハニホニハニハロハニロロローハ
かはかぜさむくちどりな

ホイーロイロイホヘホニハ、ニハハ
くまつみにつらきをきこ

ハーロイ、ロハニーハロイホヘーホニ
たつつにやるせ

ハ、ニ、ハニーハロイーホイイイ、ニイーホ
ないわいな

ハホイ、

○我ものと思へば輕き傘の雪、戀の重荷を肩にかけ、妹許りゆけば冬の夜の、川風さむく千鳥啼く、待つ身につらき置炬燵、實にやる瀬がないわいナ。

○がつぽれ

ハハホニホホニホヘイイイニホー、

ニホホヘホニハハ、ニホニホイーロ
をきのくらあい

ホニハハ、ニホニホイ、ロハーロイホ
のにしらはが

ハハーハニニハーロイホイーイロハ
あみゆ

ハハーホ、イロイロハホホニハーロー
るよいとさのさあれはきの

イロイロハ、ハロイホイイホニロー
くううにやれこのこれわのさ

ニハハハハ、ニホーニホイロハーハ
みかんふうね

ロイイー ハホホハホホ、ホホホロハー
ニロハ、ニホー ニホイ、ロハーロイホハ
ハーハー ニニホーロイホイーイロハー
ハハホ、イロイロハ、ホニハーロー イ
ロイロハ、ハニハーロイホイイホニハ
ホニハハハ、ニホー ニホイ、ロハーロ
イイーハホホハホホ、イーイロハーロ
ハ、ニハイホイー、イーイ ロハハロハニ
ハロイホ、イイイロハハロハ、ニハロ
イホロハーロイホイ、ハハ、ホニー
ハ、ニハロイホ、ニホーイー、イロイホ
ニ、ホニホニハロロハハロイロロ

ロイロロイロロイロロイロイホ
イホニハニホホホ

○沖の暗いのに白帆が見ゆる、よいとさのさ、あれは紀伊の國、やれこのこれはのさ、みかんぶね、みかん船、みかん船が見ゆる、よいとこりやさ、あれはきのくにやれこのこれはのさ、みかん船ぢやあ豊年ぢや、漁作ぢや、あすは旦那のいねかりにこたばにからげて一すなげた、なげた、さつさ枕にどがない、をせせのこれはいさにこができたこのなんでもせ、

○因州いなば

ロロロハハハニニハ、ハ、ロロ、ハハ
ニハハロロ、ハロロイホ、ホイホイホ
イロイイイハ、ロロロハハニニ
ニハ、ロハロロハハニハハロロハロ
イホホイホホイロハイイ

でなかなるをにめがまんだら
八、ロ八ロロ八八ニ八八ロロ八ロロイ
であとなるをにめはるわをにで
ホ、ホイホホイホイニ八イイイ八、
ロロロ八八八ニニニ八、ロ八ロロ八
にめがいふことにはじめてせ
八ニ八、ロロニ八ロイホ、ホイホホイ
つぶんにでたときはとらどどんの
ホイニロ八イイイ八、ロ八ロロ八八
をみさいにはやされてめつきはなつき
ニ八八ロロ八ロロイホホイホホイホ
いとざる
イロ八イイイ八、ロロロ八八八ニニ
ニ八、ロ八ロロ八八ニ八八ロ八ニ
なかなるをにめがいふこと
ロイホ、ホイホホイホイロ八ロイイ
にはちめてじたくへいたとき
はさんゴかはのをんばさんにむしんゆ
八、ロ八ロロ八八ニ八八、ロロ八ロロ
てげんもほろろにひかられた
イホホイホホイホイロ、八イイイイ八
あとなる
ロロロ八八八ニニニ八、ロ八ロ

とにぬのいふことロ八ロローイホホイホホホ
みなりにをちたときにこしのはねち
イホイロ、八イイイイ八、ロ八ロロ八
がへてなんはゆきこのろろち
八、ニ八、ロロ八ロロイホ、ホイホホイ
くちくようなざぞ
ホイロ八イイイ八、ロロロ八八八ニ
ニニ八、
○城州都の東寺サンの、しかも羅生門の真中で、鬼めが三匹出逢しが、先なる鬼めが青鬼で、中なる鬼めが斑で、後なる鬼めが赤鬼で、先なる鬼めが言ふ事にや、始めて節分に出た時はどらごぞんの御見舞に囓されて、目突や鼻つこで痛ふござる、中なる鬼めが言ふ事にや、地獄へ年季にいた時は、三途川のおばゝに無心云て、けんもほろろに呵られた、後なる鬼めが言ふ事にや、始めて雷神に落ちた時は、もばらの骨三枚折て難波行き、此頃ちくちく好ふござる

○梅にも春

ハニーハロイロイイホへーホイ、ロハ
ニハロイロイイホへホイニホーヘー
のもいろそ
ホイホへーホイ、ロハロイホへへホ

ニ一八、ホヘ一ホニロニ、ニホヘヘホ
ニ一ニホヘホヘ一ホニ一ハニホニ
ハニ一ハロロロイホハニハロイホ
ホイホヘホイホイロハニハロイ、ロ
ロイホニホイイ、ハロハ、ハハハハ
ニホヘホニハハハニホニハハ一ロイ
ホイハニ一ハロイ、ハロイホ、ニホニ
ハハ一ロイホイ、ハハニ、ハハニハハ
ニ、ハハニ、ハハニ、ハニニニホニニハニ
ホヘホハニハロイ、ハロロロハニハ
ロハニニハハロイ、ホニホヘホイハロ
ロイハロロロイホヘホニハ、ハホヘ

ホニハハ一ロ、イホヘ一ホイハハロ
ロロイイホイイ、ホホホニホヘホヘ
ホヘホニ、ハロイホニハホホヘホイ
ニハロイロイイホヘホイ

○梅にも春の色そへて、若水汲みか車井の、音もせわしき鳥追や、朝日にしげき人かげを、もしやと思ふ戀い慾、遠音かぐらや數とりの待つ辻占や鼠なき、逢ふて嬉しき酒機嫌

○沖の大船

ニホニハロハニホホハホホ、ホニホイ
イホニホホハホホ一、ホニホハイ一イ
ロロハロハニハ一ロイロホ、ニホイ
イイホホニハロ、イイロロハロハハ
ニホハイイロイ一ホニホホハホホホ
ニホ、イロ一イ一ホニ、ホホニニイイホニ

まねくやらみるよりせんどしゆがろをた
ホイホニハ、イイロロハロハハニホハ
てていかりをぶんぶとみなといれ
イイ、ホホヘホハー ハイロハロハハ
よかねーよかよか
ハニホホー、ロハロハ、ロロハロハロハ
ハロイイロホイイ、イイイイイ、イイ
イイイイイホニハイホニハニホ

○沖の大船な、磯ばたに、三十三だんの帆を巻きあげて、をもかじとりかじをきあらし、向ふの島から女郎しゆが出てきてまねくやら、見るよりせんどしゆはろをたてい、いかりをざんぶと港いれよかね、よか〳〵

○木津川

をりからつきのいで し
ロハロロハハハー、ニホヘホニハロハ
はや
ニハロロイイロイホイハハ、ロハイ
なが

ハハ、ロロハロハロハー、イイイーホニ
きゴ
ホ、イーロハホホーニハ、ニハニホイ、ホ
くれな
イイイイイイイイロイホへへホニ
にそめこみ、
ーニハロロハロハニハロハーロロ
しもみじ
ホ、イロハロハロハーロロホニホ、イ
ロハホへホニハ、イロロイホニホイロ
ときようにしきせん
ーロ、ハハハハ、ハハハロロロロロ、イイ
ロホホーニハ、イハハーハ、ロハーロイ
イーロハロハロホホホニホホホイロホ
ホホハハハロハハハハハハハハ
つへはらはらとふるはなみだかニハロハニ、ニホイロハーロイイホニ
あきさめかニホイホニホニハ、ニニニ、ニホヘ

ー ホ ニ ホ イ ロ ー イ ホ ニ ホ ニ ハ ロ ロ ハ ニ
ハ ロ ロ ホ ニ ホ、

○たりから月の出しほや流るゝかたは木津川へ、こきくれないにそめこみし、もみじ故郷へ歸せん、散りゆく葉ずへはら〳〵とふるは涙か秋さめか、しかとはなかん川づゝみ

○落し文

ホ イ ー ハ ロ イ ホ ヘ ホ ニ ハ、ハ ハ ハ、ニ
ハ ハ ハ ー ハ、ハ ニ ハ ニ ー ハ ロ ロ ロ、イ ホ
ホ イ イ ロ ハ ロ ハ ロ ロ ホ ニ ハ ニ ホ イ、
ロ ハ ー ロ イ イ イ イ イ イ イ、ハ ニ ハ ロ ロ
ハ ロ イ ホ ヘ ホ イ ロ ー イ ハ ロ イ ホ ニ ハ
ハ ニ、ホ ホ ホ ニ ハ ロ ー、ハ ニ、ホ ー イ イ
ハ ロ ニ ー ニ ハ ハ ハ ー ロ イ ホ、イ ロ ハ

ホ ー ニ ハ、ニ ハ ホ イ ホ イ ハ ハ ハ ハ ハ
ロ ハ、ニ ハ ロ イ ホ イ ロ ー イ ホ ヘ ホ イ イ
イ イ イ、ハ イ ホ ニ ニ ー、ロ イ、ニ ハ ロ
ハ ロ ハ ハ ハ ハ ハ、ハ ニ ホ ニ ハ ロ イ
ホ ヘ ホ イ、ロ ハ ロ イ ホ ニ ニ、ハ ニ ー ニ
ニ、ハ ニ ニ ニ ハ ニ ホ ニ ハ ニ、ニ ホ ヘ ー
ホ ニ ニ ニ ニ、ハ ロ ハ ロ イ ホ ホ イ イ ロ ハ
ハ ロ ハ ー ロ ロ ホ ヘ ホ、ニ ハ ホ イ ロ イ、ロ
ハ ニ ー ハ ロ イ ホ ヘ ホ ニ、イ ロ、ロ ロ ハ ー
ロ イ ー、ホ ヘ ホ イ ロ ロ ハ ホ イ ホ ホ ニ
ハ ロ ハ ー。

○いづかたへ、ないて行くらんほとゝぎす枕の山のまよい道きくたび〳〵に珍らしく何時も初音の心地して、可愛〳〵

の忍び音も、つきぬ餘波がおりわけの、きつう時いたか明がらす。

○春雨

ハハハハ、ロハニハロハロロホー、イイ
ロハニハホイホニハロハロイホニホ
ヌルルウグヒスノハカ
イイロハロハロロホ、ホイホヘホ
ゼニニニ、ホイホヘホニニ、ホニハロ
ウメガカ
ロハロハニホホニハ、イイハ、ホニ
ハ、ロハーハハハ、ハニーハロ、ロロ
ロハ、ニーニハロハロロホーニホハ、
コトリデサヘモヒト
ホイイロハハロロホイ、ホイロハー
スビニ
ロイーホホイイハ、ホニハロハロイ

ホ、ニホイロハーロイホホニハロ○
、ニホホホ、ニホホホホホ、ヘホニハニ
ホニハイロロロハ、ロロロ、ロロハ、ホイ
シヤウグヒスヌシハム
イロハロロイホ、ニホホニホニハロ
、ロハロハニホホイホイイイホホ
ガニナルナラバ
ヘホニハロー、ハーロイ、イホニ、ニ
シクウバイチヤナイ
ホイロイホホヘホニホニハロ、ロハ
ロイー、ニニニ、ホニハハロハハ、ハ、ロ
ハーーニホホニニハロロハハハハハ、
ハホニホイロイロハロロホー、ホニ
ハニハ、ユハロロホー、ニホ、イロイ
ロハニハロロホ、ニ○ニニ○ユホニ

ハロハロロホ、ニホホニホニハイ
ロハロハニハニハ、ホニハロハ、

○春雨に、しつぽりと濡るゝうぐいすの、羽風に匂ふ梅が香の花にたはむれしほらしや、小鳥でさへも一トすぢに、ねぐらさだめぬ氣は一つ、わたしやうでひす主は梅、やがて身まゝ氣まゝになるならば鶯宿梅じやないかいナア、サアツサ、何でもよいわいな。

○黒かみ

ホーローイーホーヘホニーハー、
ローハ、ロニーニーニーホイーホー
ヘホニーハー、ローハー、ニホーヘホ
ニーロハーハーロイホーヘホイー
イイイ、ニニホーロイホーヘホイ
ー、ロローロホハーニハロロー、ホ
ロハーロホイホハー、ロハロハ

ハニニー、イホヘニーハ、ーロ、ロハー
ハニホーヘホニーハーロイロハハハ
ロロロロハーローイ、ニニーハロニニ
ハーロニハー、ロイロロ、ロホヘホニ
ホイー、ハロイホヘーホイイイ、イ
イイイホニ、ハニホイホ、ニハニニ
ハ、ホホホホヘホニハーニハロハニハ
ロハハハハハ、ニハニハロロロロイロ
ハホイホニ、ホイハハハロイイ、イイロ
ハロイーニニホイロハイホヘーホイ
ロローニハニーハロロ、イイホヘ・ホニ
ホイロイロホヘホニハー、ニハロハロイ

ニハロ、ロハロハニーホヘーホニハ、
ロハロハ、ニーハロハロイホヘーホイ
イイ、ロイホヘホイホヘホホヘーホニ、
ハロハニハ、ニロニーニニホヘホヘホ
ニハ、ロハ、ニーハロハニハ、ロニ
ロハホホロ、ホイーロハニハニホイ
ロハーハイ、ホヘーホニハーニハホヘ
ホイーホヘホニ、ニホイホニハ、ロハ
ハロイ、ホヘーホイイイ、ハニーハロ
イホヘーホニハ、ニハロハー。

○黒髪の結ばれたる思ひをば、解けて見たよの誠こそ、心づくしもわだなぐさ、袖はかたしく妻じやと云ふて、愚痴な女の心と知らず、しんと更けたる鐘の聲ゆうべの、夢の今朝さめて、床しなつかし逍遥なや、積ると白らで積る白雪

○松づくし

ニ、ホイ、ロハホニホイイホニ、ハロハ
ロイローロイ、ローハロハ、ハニハロ
ハロイホニニホイ、ロハホニホ、イ
イホニハロハロイ、ロイ、ロローロイ
ローハロハハニハロイホニハロハロ
イ、ロハホニホイイホニハロハ、ロ、
イ、ローロイローハロハハニハロハロ
ニホイ、ロハホニホイイホニ、イホ、
イロハロイホニハ、ロハニハロハ、ロ
イ、ロロロイ、ローハロ、ハニハロハロ
イホ、ニニホイ、ロハホニホ、イイイイ

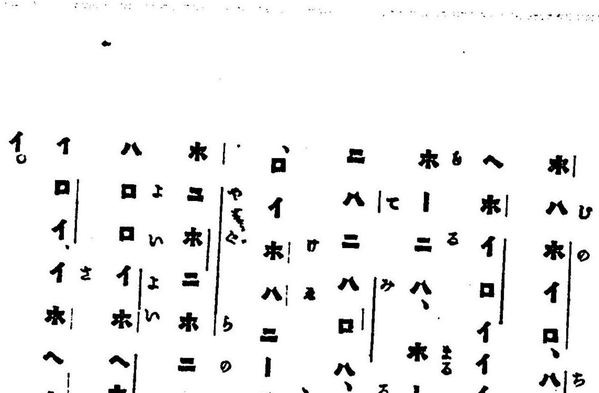
つ
八、ロイ、ロイイイロハロイイロニハ
ロハロイホニ、ニホイ、ロハホニホイ
イホニハロハ、ロイ、ロロイロイホ
ロニハニハロハロイホニ、ニホイロ
八ホニホイイホニハロハ、ロイ、ロイイ
イロイイ、ロハニハロハロイホ、
ホニホイロハホニホイイホニハロハ
ロイ、ロイイイ、ロイイイ、イロロイロー
ハロハニホニハロイロハホニ
ホー二、ロニハロイホニ、ニホイニホ
ーニホー。

○うたい囃せや大黒、一本目には池の松、二本目には庭の松、三本目にはさがり松、四本目にはしがの松、五本目には五

イイホヘーホイ、ロイホホヘーホイ、ホ
ヘホイ、ニーニハロハーロチホ、イロ、
ハーニニ、ホーホニホイロ、ホヘホニ
ニーホイハ、ハニハロイ、ロニホーニ
ハー、ハハ、ハハ、ハハハロハニ、ハニハ
ニーハロイ、ハニーハロイイ、ホヘ
ホニホイ、ニニーニ、ハハーロイホイ
ロハニーハロロイホヘーホニハイ
、ロハニーハロイ、ロイイホヘホイ、
ハロイロイイイホヘーホイ、ロイホホ
ヘーホイホヘーホイ、ロハロイホイ
ロイホ、イホイホイーホニイイホ

葉の松、六つむかしの高砂や、尾上の松や曾根の松、七本目には姥小松、八本目には濱の松、九つ小松を植並べ、十でとよくの伊勢の松、此松は有情の松にて、悔け有馬の松が枝やくゞけばなびく相生の松、又いついつの約束や、日をまつ時まつ春をまつ、連理の松に契をこめて、目出度や、若戎、

○京の四季



ハニーハロイロイホヘホイ、ロハニ
ハロイー、イロハー、ロハハ、ニニー
ホニハハロイホ、ロハロロイ、ニハニ
ホニニニニハニ、ホヘホニホニハホニ
ハハハロイイロロロ、ロロハロハ
ロハニハロハーロイーイ、ホヘーホイ
ユハロロハハニハハーロイホイ、ロハ
ニーハ、ロロイホヘーホニハイ、ロハニ
ーハロイロイイホヘーホイ、ハロ、イロ

ニーホハー、ニハロイ、ホヘーホニハニ
ニホヘーホニーニ、ニニーハロハハ
ニーユハハロイホ、ロハロハイイ
ホハホイロ、ハ.ロロハーニハロイ、ホ
ヘホイロイイイ、ホイーホニイイ、ホ
ホーニハ、ホーホニヘホーホニハハ
ニハニハロハ、ハニ、ニーニハハハー
、ロイホハニーハロ、ハニハロ、ハロイ
ホニホニホニハハーロイホイ、ロハニ
ハロロイホヘホニハイ、ロハニハロ
イロイ、イホヘホイハニイホヘーホ
イ。

○春は花、いさ見にごんせ東山、色香あらさう夜櫻や、うかれ〳〵てすいもふすいもものがたいよいよいよいよいよいやさ、二本さしてもやわらふ祇園とうふの二軒茶屋、みそぎそ夏はうちつれて河原でつどう夕涼み、よいよいよいよいよいやさ、眞葛が原にそよ〳〵と秋の色ます華頂山、時雨をいとふからかさのぬれて紅葉の長樂寺、思いぞつもる丸山に今朝も來て見よ雪見酒、そして櫓のさしむかひよいよいよいよいやさ。

○声かり

ハニーニニ、ロイホニホーヘホイホヘ
ホイロイホイロイロー、ホニハロイ
ハニハロロイハニハロイ、ロロイニ
ハロロイ、ハニハイロイホニハニホイ
ホニニホヘホイロロ、ロロイー、ハ

ロイホニハ、ハニ、ホーニハニホハ
ニーハロ、イロハ、ロイホホヘホニ、
ハニホホニホハニハロイ、ロハニハ
ニイロイホホホニハニホイホイロハ
ハハロハーニニ、ニホヘーホニハロ
ハロイ、ハニ、ホーニハニホニホニハ
ロハ、ロハハ、ニハロイ、ホヘホイロ
イハニイホイーホニ、ホヘホイーイー
ホニハニーハロイ、ロハニハニーハロ
ハニーハロ、イホヘホイーホニ、ホヘー
ホイ、ロハニーハロイロイホーヘホ
イー、

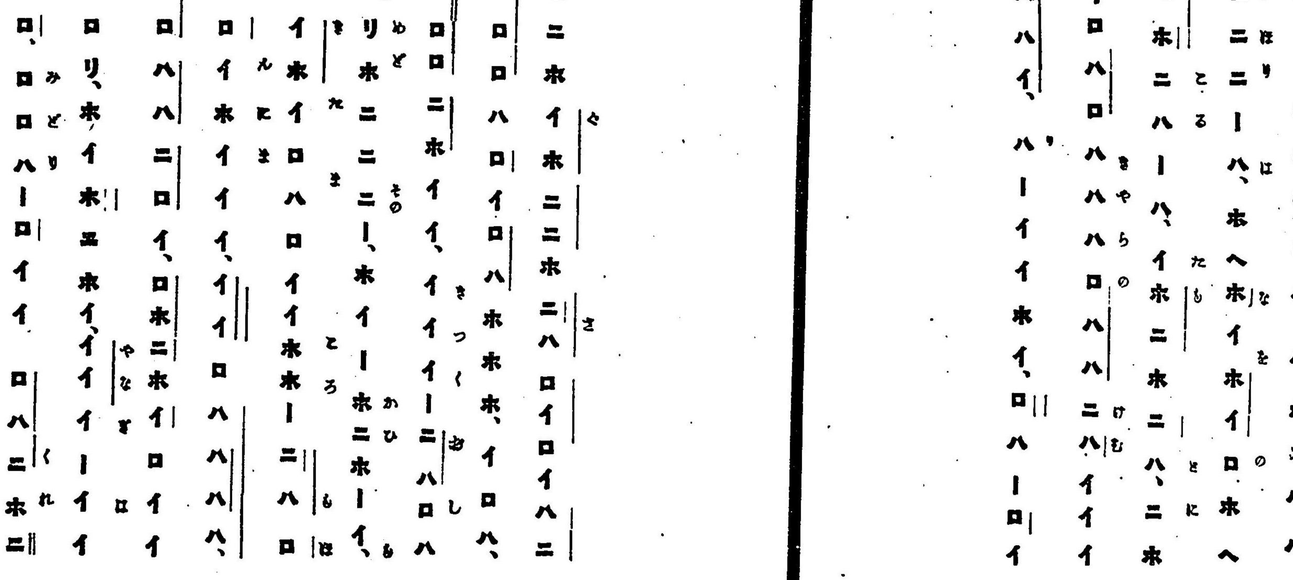
○我は戀には狂はねど戀と云ふ字が迷ふゆへ、さりとては白鷺の、止まれとまれと招く手風に往き過ぎて、又も催ふす濱風に、蘆もさはだち鐵も浪、松風こそはざゝんざ。

○鶴の聲

ホイーロイイハホーホー、ニホイホ、
ローロ、ロハニハニハローイーホホ
、ロイホヘホニーハ、ホーヘホニ、ホ
ニ、ホニハーロ、ロハーロイロハニ、
ホーヘホニーハーハハ、ロハーハハ
ロイ、ホーヘイイイ、ホイーローハニ
ホヘホニーハ、ニハローイ、ホー、ニニ
ニーイイイ、ロハロイーホイ、ホヘイ
ホヘホニーハロハニイホニニホニ
ニーホヘイ、ロロロイホロロロイ
ハニヘロイホ、ニホヘホイ、ロハニ
ホイイイ、ホイ、ロローニイヘロイホ
ホホ、ニホホヘホニ、ハニホーニハ
ロ、イホヘホイ、ホホヘホニニーハー
ハロイロロハ、ロニーニニニ、ニホ
ヘホー、ヘホニーニーハロハハ、ニハ
ロ、ハロイホイハロイイホニハ、ハ
ハニ、ニホーイーロハハハ、ホイイロ
ハーニーニ、ニハロイ、ロロハロロイ
ニホヘホヘヘヘヘヘヘホイー

○檐の雨立寄るかげは浪花津や芦ふく宿のしめやかに語り明せし可愛とは虚か實か其の言の葉に鶴の一聲幾千代までも末は互いの友白髪

○袖香爐



、ロハロイイニホイ、ロハロハーニ
ハロハリホー、ニホー

○春の夜の閨はわやなし其れかとよ、かやに隠るへ梅の花、散れど薫りは猶のこる、たもとに伽羅の煙りぐさ、きつく惜めど其甲斐も、なきたまころもホンにまわ、柳はみどり紅の、花を見捨て皈る雁。

○雪

ホイーホヘホイイイホニーハーイ
ホヘホイーイイロハーロイホヘー
ホニハーローハー、ニイハーローハ
ニホーヘホニハロハニハホヘーホ
ニ、ハロハロイ、ロハハロハロハ、
ハロイハハハ、ロハニハニニハロ
イ、ニ、ハニホヘホヘホヘホニ、ハ
ハ、ロハーロイ、ロイホイ、ハニホハ

ロイホ、ホイロホニ、ニホヘーホハロ
イ、ホヘホニニニニニ、ニハホヘ
ホイイホニハ、ロハニニハハロイ
、ハロイハニホニハニハロハーロ
イホロハーロイホヘホニハ、ホヘホニ
ハ、ロハニーニニハニニニーハ、ロリ
ロハ、ホヘホニハロイ、ロロ、ロイホ
ヘホイ、ホヘホニーロイホヘホイ
、ハニーハローロロ、ロイロイホヘホ
イホヘホイ、ニハロハロイホヘホニ
、ホヘホニハ、ニホヘホニハ、ロハ
ニーハニハロロイホロイホホホロ

ハロイホヘニハ、ハニハ、ロハ、
ロハハニハロロイホヘホイ、イホ
ニーニー、ハハニホニホーホ、ホヘ
ホニホニホニホイロイホホホ、ニホ
ヘホニハロイイ、ロイイーホ、ハロ
イ、ハロイホニハホイハホヘーホイ
イイ、ロロロ、ロハニハロイハロイ
ホヘホイイイホニハ、ホロロハロハロ
イホイロハロイイホニハハハ、ロイ、ヘ
ホニハ、ロハハニホヘーホイ、ホイ
ホヘホニハロ、ロリロハ、ニニハニ
ハロハロイホ、ホヘホニーニハ、ロ

ハニニニニホヘホニーニハ、ニホ
ニホホホチヘホニハハハ、ニハロロ
ハロイ、ハハロニニニニーホヘホ
ヘホヘホニーニホイホイロイホヘホ
ニホヘホニーニ、ホイホイロホホヘ
ホニホヘーホニハ、ロハニハロイー
ハロイホイーホヘホイ、ロハハ、イ
イイイハ、ハニニハロー、ロロ、ホニハ
ニニハロロー、ロイホイロハニホハ
ロイ、ハニホニニニ、ニ、ハ、ニーニニ
ヘホーニ、ヘホーニヘホニハ、ハニ
ホヘホニ、ハニホ、ハニハローイ

ニハロハロイイ、ロハロハロイー
イイハハロハロイイホニホイロハ
ロイロハロイホ、ロイホヘホニーハ
チヘホヘヘヘホヘホニハ、ホヘホ
ニーニハニ、ニホーホー、ヘホニハー
ホニハハニハロイロ、ロローロ、
ロイイホヘホイイイーハハハロイ
ロハハハ、ロハーニハハホホイロ
ハーホニハニチヘホヘホニハロー
ニハロハロイ、ハニハロイホヘホ
イロイホヘホイ　ホホホホホーヘホイ

○花も雪も拂へば消きたもとかな。ほんに昔しの昔しのことよ、我がまつ人も我を待ちけん、鶯森のおとりに物思ひ羽の凍るふすまに鳴く音はさざなみさなきだに心も遠き夜半の鐘、聞くも寂しき一人夜さ、かすかに擽くあられの音ももしやといつそせきかねて、おつる涙の氷柱より、つらき生命は惜からねども、戀しき人は果ふかく、思はぬことも悲しさに、捨た浮世の山かづら。

○こすのこ

ホイーホヘホイ、イイロニハ、イイロ
ハニハ、イハニホニホホニハハハ
ニハロハ、ロハロハロリホ、ホヘホ
ニホニハニーハロハニホ、ニホホイ
ロイ、ハニハローロロ、ホイーロハニ
ニニハ、ハニホヘホヘホイ、ヘホニ
ニハ、ホイホイハハ、ハハハニホヘホイ
ホヘホニ、ハハハロイ、ハニハロハニ
ハロイ、ハニハニ、ホヘホニハニニハ

と す つ き や ず

ロイホヘーホイ、ホヘーホニーハ、ホ

ヘホヘホニハハハ、ロイイ、ロハー

ロイイロニハ、ロイホホヘーホニハ

は も の を

ロハニニ、ホヘーホニホニハロイ、ハロ

や る

ロハロハロハ、ニホヘーホコホ、ロハ

ニーホロハーロイホイイハ、ロハハ

せ

ハ、ニハロイハロイーイ、ホイロイハ

ロイホ、ホヘーホエホヘーホロハ

ロイハロホイロイロハーロイイホヘ

な や

ヘホイ、ホヘーホニハーハ、ハニーハロ

ハーロイ、ハニーハロハーロイ、ニホヘ

ホイホイホヘホニ、ニホーニハ、ロハ

い ま つ ●

ロホイロ、ロハニハニニ、ハニニハロロ

ハハロイホヘヘホニニホーニハニハロ

か せ

、ローイホヘーホイーイ、ロハ、ハニー

ハロロハーロイホホヘ、チヘホヘホ

ヘホニハハハロイー、ハニーハロハ

ーロイホヘホイロハロハニホイホイ

ホヘホニハーハ、ニハホヘーホニニ

ハニハロイイ、イロハーロイホハニハ

ロイホイロハロイホヘホニハチヘホ

へ と

ヘーホ、ホヘーホニハロハニーニニ

と た へ も や ま

ハニホヘヘホヘーホニハロ、ハロー

ほ と

イホイロイロハロハニホニハロイハ

ホホヘホイイ、ロハハロイ、ホヘホヘ
ホニ、ハハハ、ロハーハハハ、ニハロイ
イ、ニニハハロ、ホイロハロ、ニホ
ニハニ　ハロロー、ハーロイホヘホニ
ハニハニロイホヘーホニニ、ハハニ
ーハロロハーロイホヘホヘホニハ
ホヘーホイ、ホヘーホニーハロハニ
ハロハロイロイハニハニハニーハ
ロイ、ホイロイホホホヘーホイホ
ヘーホイイロハハーハハロイ、ロイ
ホヘーホイーホホホホヘホイー

○うき草はしゐんのほかのさそふみづこひがうき世かうきよがてひかちよつときゝたい松のかせとへをこたへも山ほと

ざす月やはものゝやるせなきしやくにうれしきおとこのちからじつと目に持つなんだをさへ苦痛隠して笑ひ顔

○八千代獅子

ホイーホヘホイイ、ホヘーホイイロ
ニハ、ホニホ、ニホホ、ロリホ、ホイ
ーホヘーリイホヘーホイイロニハ
ロハホイーホーニ、ハニイホニハ
ニーハロー、イホヘホイイイイイ
ハーハ、ホイハホイーイ、ホイイホ
ヘーホイロハハニーハロロハー
ロイホ、イロハーロイイイイイハ
ニーニ、ハハハロイロハホホヘホ、イ
ホヘホイイ、ハロロロハロイホホヘ

ホイホヘホイイイハーハ、イーハ、
イロイイ、ロロハハーロハーロイ、ホ
ホヘホイ、ロハロイイロハニ、ハホイ
ホヘホハハロイ、ロハロハニ、ホニーハ
ーロイホヘホーイ、ロロロイロイ
ホイロハーロイ、ホヘホイーロハハ
ハホイイロハー、ニハロハニホヘホイ
ロハロハハーロハ、ニ、ハ、ロイハハハ
ロイーイー、ロイハーロイ、ハロハロハ
ハロロイイロハニホハハロハ、
ヘーホニーハ、ロイハーロイ、ロイ
ホホヘホイホヘホイイ、イロイホー

ヘーホイホホニホニハニホニハニ
ホイーホ、ニーニニイホニイホヘ
ホイ、ハロロロ、ハロイホホヘホイ、ニ
ハニハロロハロイホホヘホイホヘ
ホイイ、イイハーハイーバイロイ
イ、ロロハハーロハーロチ、ホホヘ
ホロ、ロハロハロイイロハニハホ
イホヘホハハロイ、ロハロハニ、ホ
ニーハーロイホヘホーイロロロイ
ハロイホイロハーロイ、ホヘホイー
ロハハハホイイロハー、ニハロハニ
ホロハニハーニハ、イロハニハ

ーロイイニハローロイ、ハロハロハ、
ハロ、ロロイイロハニ、ホロハロハヘ
ーホニーハ、ロイハーロイロイホホ
ヘホイホヘホイイ、イロイホホホホ
ヘホイ、ホホホニホニハニホニハニ
ホイーホニーニニイホニイホヘホイ
、ハロロロハロイホホヘホイニハニ
ハロロ、ハロイホホヘホイホヘホイイ
、イイハハ、イハイロイイロロハハ
ーロハーロイ、ホホヘホイ、ロハロハ
ロイイロハニホニハロイ、ホヘホー
イロロロイハロイホイロハーロイ、

ホヘホイイロハハハホイイロハハ
ロハニ、ハ、ニロハハハハロイハハロ
イ、ロハロハハロハ、ロハニハロ、ロ
ロイロイハニホハハロハロハハロ
イホイハハホイハホイイイイイホイ
イホヘホ、イロハホイホホニハ
ハニホロリホロハロイ、ロハハニ
ホヘホイホイイロニニイホハロ
イ、ホヘホヘホイイロニニホハニハ
ロハーハハハ、

○いつ迄も變らぬ御代にあい竹の代々は幾千代八千代ふる雪ぞかゝれる松の二葉に〳〵

○通ふ神

ホイイイ、ハホ、ホホヘ、ホイホヘヘホ
イ、ロハーロイロイホイ、ハニハロ
ロハハロイホ、ニホホーイイ、ロハニ
ニニハロハーロイホ、ロイロイホニホ
イローロ、ハニニニ、ハニニハロハ
ロハロイホ、ホヘニホホヘホイロハ
ハ、ニハホイハロハロハハニニハ、ロ
ローロロハロハ、ホヘーホニーハロ
ハロイホヘーホイイイ、ニホーイイ
ハハニニニハハロハーロニホイロハ
ニーハニホイローロ、ハニニニハニ

ーハロハロハロイホ、ホヘホニホ
ヘヘホイロハハ、ニハ、ホイハロハ
ロハ、ハニハロローロロハロハニー
ハロハロイホヘーホイロイホニ
ホホニホホロハーロイホヘーホニ
ホイホニハ、ハニニハロイホヘーホイ
ハハハ、ロハニハホイロハニホハ
ロイホ、ニホ、イホニホヘーホニニ
ホヘホニハロイホイイイ、ハニニハ
ロイ、ローロロロハニロロロイホイ
ロロロ、ロイロイホニホホ、ニホホ
ロハーロイホヘーホニ、ロハロイホ、

ホイロハ、ホイロハロハハハ、ロ
ミニニ、ホヘーホニーハロハロイホ
ヘヘホニハホイロ、ロハニーハロイ
ーホホホホホヘホイー、

○田毎にうつる月影ならで、夜毎にかわる詞の數の、中に粹わり、不粹のすまぬ心に清む月の、何がゑんぎの種じややら、尻眼づかひを鉄所にして、さかせぬ首尾をわけある様に、愚痴なせりふが戀の實、末は野となれ山水の、かみの赤縄を任せなん。

○七草

ニホーホホホニホロイホイロハハ
ホニ八、ロハハハハ、ハハハロリロ
ハロハニニハユロハロイ、ニハロイ
ペ
ロイホホイロイイロハハ、ハロリ
ホニハーロリホニホニハロハロロ

ニニハロロハロイイロニハイイロホ
ホニハニホーホニハロイロハーニ
ホホニハ、ニハー八、ニホロハロハ
ニホヘホニホホロイ、ロイイロー八、ホ
ホホホ八、イロイホーニハニホロ
ロ八、ニホロ八、イイホ、イイニーニ
八八ーハロー八、ハーハロー八、ロハ
ロハロロイイホニホヘホイロロイ
ロロイーホニニーイイホニホヘホ
イロロイロロイーホニニーニホヘホ
ニニホニハロハニホヘホニニハ、ニ
ニハニホ、ニホローイホ、イイーイホ

ニ ホ ホ イ イ ー イ ホ ニ ホ ホ イ ロ イ ー ホ
、ニ ホ ホ ニ ハ ー ロ ハ ロ ホ ー イ ロ イ、ハ ー
ニ ハ ー ロ、ロ ハ ニ ハ ニ ハ ロ ハ ニ ニ ロ ハ
ロ イ イ ホ ニ ハ ロ リ ロ ハ ロ ホ、ニ ニ ニ ニ
ホ イ ロ イ イ ホ イ イ ホ ニ ホ ホ イ ロ
ニ ハ ロ ー イ イ ロ ー ハ ー ロ ー イ ロ ロ イ
ロ イ ホ ヘ ホ ニ ニ ホ ニ ー ハ ー ロ イ イ ホ
ヘ ホ イ ホ ヘ ホ イ イ ロ イ ホ ハ ロ イ ホ ニ
ハ ロ イ ロ ホ ー ニ ロ ニ ホ ニ ハ ー ロ リ ー ホ
ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ニ ホ ハ ハ
ハ ハ ハ ハ ロ ホ イ イ ロ イ イ ロ ハ ロ イ ロ
ハ ハ ハ ハ ハ ハ、ロ ハ ロ リ ハ、ニ ホ ニ

ホ イ イ イ ホ ホ ー ニ ハ ニ ホ ニ ハ ニ ホ イ
ロ ハ ハ イ イ ロ イ ー ホ、ニ ホ イ イ イ イ イ
ホ ホ ニ ホ ー ニ ハ イ ホ ニ ホ イ ロ ハ、ロ
ハ ニ ニ ハ ロ ハ ー ロ リ ホ ロ ハ ー ロ ニ ハ
ー ロ リ ホ、ロ イ ー イ ホ ニ ホ イ ロ ハ ハ ハ
ホ、イ ロ ハ ロ イ ホ ニ ニ ホ ー イ、ロ ロ イ イ
ホ イ ホ ニ ニ ー ホ ニ ー ハ、イ ホ ニ ハ ホ
ロ ハ ロ イ イ ニ ホ イ ロ イ ロ イ ホ ホ ニ
ハ ー ハ ホ ハ ニ ホ ー。

○すめらぎの我代もつきじ石川や、蟬の小川の絶じと思へば〳〵音すめる、すゝ菜すゞしろ神さびて、雲の上にもはこべやら結びし水のへだても浪の佛のざよ、あめつちごきようやわらぎて、光りのとけきちりわかな、なづなせりつば屐の女がもらさで祝ふ千代八千代

琴歌

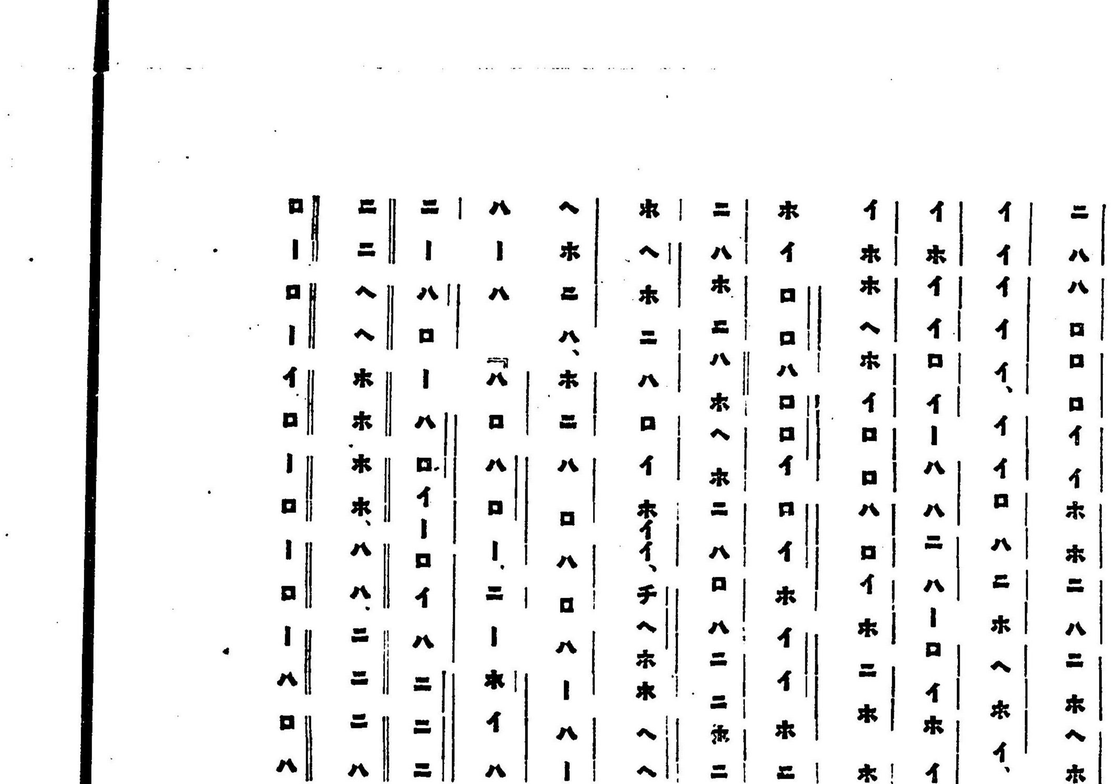
（琴の合奏は第一の糸と尺八のハと）

○殘月

イハハニホーホイ、ロハーハーハ
ニーニハニニ、ホヘロハーハ、ハ
ロイイイハハホイ、ハイイーイイ、イ
イローハロハハハロハニホイハーロ
イ、ハロイイヘホニニホーニハ、ロハ
ロハロハーロイ、ロイイニーハニホヘ
ーホニハロハーロイロイホヘーホイ
ロ、ニハ、イロハーハ、ニーヘホヘホニ
ーハニハニハロハイロハイハニー
ニハニハニ、イロイホニハニホヘー
ホハロロ、ニハロイイ、ニハニホヘ
ヘヘーロホイイ○ロニハロハロハ
ハニホニハロイホヘヘホニハーニ
ハロイ、ロイイ、ヘホニハニイホヘー
ホイイロニハ、ロハハーホイホイ
ホニハ、ロハハハロロロハニホヘー
イーロハ、ホイイニハハニハホニ
ハロハニホヘハニロハロイ
イロハハ、ハーロイイロニハ、イイロ
ハ、ニハーロイ、ヘホホニハロハロイホ
ヘロハニホーホイ、イロロハユユハ
ロロロロハハ、ローロハロイイロニ

ニホーニハーハハロロハニーハロイホ
ホホニホーホホ、イイホヘーホロ
ハーロイイホヘーホニ、ニハニホーニ
ハロハニーハロイイ、イイハハハイホ
ロロイホヘホ、ニハニホヘホイ、ロホ
イーイニハホロホロホ、ヘホニホニハ
ーーハーハロハロハハハーロイ、ハ
ーイローハ、ニハホヘーホイーイ、イイ
ハハハ、ロハニホニホニニハホホホー
ローホーホハホーホイハロイホヘホ
ニニホヘホヘヘヘイロイハニホニハ
ニハロロハロイホヘホイロイホニハ

ハホイロハハーハーロハーロイホヘ
ーホイー、イーハーー ロヘ、イロ
ハ、ロローローロハニハロローロイホ
、ホニーハロハーロハーリホロハイ
ハロイホニハニホイロハーハロハ
ーハロハーハニーニ、ホホーチホ
ヘホニハハーイロイホーホ、ニ
ホーホーホヘヘーチホヘホニハニ
ホーヘチホリニニホニハロハニニ
ホハハロハイロハホイハニホヘホ
ニニハニハロハロイロイイハハハホ
イイイロハ、ニハニニホヘホヘホ

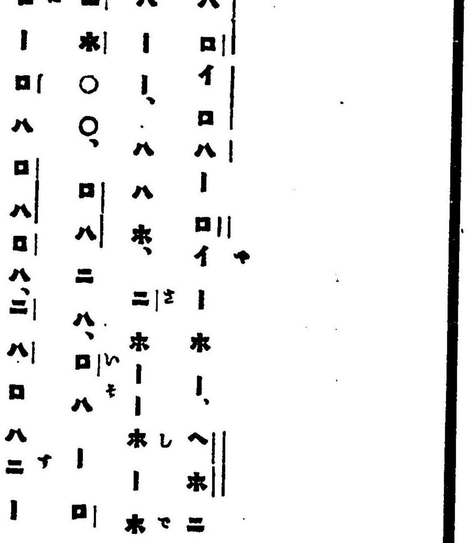


ニハ「ロハハーロイホへホイイロハ
ニホホニニホイロハイイホイロロロ
ロロロ五ホホへへニニハハニハロロニ
ニニロニロニロニへホニハニハロ
ホホニハニハニハロローハハニニハ
ホホへホイハーハハハニニハハホ
ホホホイホへホイイロロハハロロハ
ハハロイーロハロハニニハロロイ
ニニハロロイホニハホイハロイイイ
ロハロハロハハハハロロハハハハ
ーニニホへホイイイイーホへホ
へホへチチチへホホホホへへへホニ

ハへトへトへトへトへトへトホホチ
ーチホへホニハへハへトへチホへホ
ニハホへホニホーへチチホへへへ
ホニハホニホハーロイホへホイホ
へホニハ「ホホホホへハへーニーハ
ロニーハロハーロイロイロイホニニ
ホニハホイホイイニホイニニホニ
ハハハーハハニニハニニホへ
ホニホホホホイハニホロロイホ
イホニハロロロロハロロイロロ
ハハロロイロロロイホホイイホニ
ハホニハニハロロハニハニー

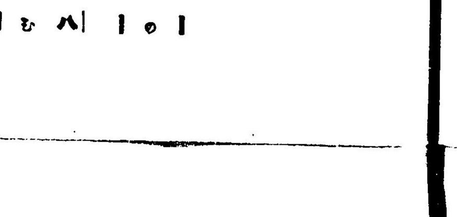
ホヘホニハーニーニーハーニホヘホ
ニホニハーニ、ホホホ、ホホホホ、ホホニ
ホヘホニハハハニホヘホホニハロイ
ロハイホイホニハニホホホニニ
ホホニホホニハホイロホイイイイイ
イイイイイイイイイイハロイイイ
イイイ、イイイイイイイイイロハ
ロハハハハハハハハハハ、
ハロイホヘホニハロイロハローロ○
ハハハハハイイロハニホヘホニホ
イイホイロハロイホイロハ、ハニニホ
ニハイホヘホイイヘホニハハハハ
ニニハニハロイホニハハハホ

ロロニハハハハ、ハハハロハハ、ハ、
ハハニホニハハロロハイロハホイホ
ニイロハロイホニハロロイ、ホニホ
ニハロハハーロイロハロハニホヘー
ホニ、ニホーニハロハーロイ、ハニ
ニニニニイ、ヘホニハロイ○、ハーいま
ホイホヘーホイハニ、ハニハニハロ
ロハーロイロイホ、ホイホイロハニ
ーハイイホニ、ハニヘホニハニハ
ロイハロハニホホホホニハニハ
ロ、イイホニ、ホヘーホハ、ハニニイ
ホニハニーハロイ、ロハニハニハホ



○磯邊の松に葉がくれて、沖のかたにと入る月の光りや夢の世をはよう、さめて如日の明らけき月の都にすむやらん。
今はつてだに臘花の月日ばかりはめぐりきて

○千鳥の曲



ホホ○ホニホーイロロイホニホイロ
ーロ、ホイロハロハーハロハニ、イ
ホホーホ、イロニーハ、ロハロ
ハニハロハニイホホイーイホへへホ
イロハニホへーホニニハハ、ハー
ロハーロイホへーホイロハニハニホ
へホニハ、ロハハハハハ、ハロロロ、
ハニニホへーホへーホニハロハー
ニホロニーハロハロイホイーロハロ
ハーロイーホホホーニハニホーホ
ハニイホホイホホ○ホニホーイ
ロロイホニホイローロ○ホイロハロ

ハーハロハニニニニホ、ハーハ、ロ
ハーロイホホ、ホへホニーハ、ニーハ
ロハロロロロロロロハロイ、ロハ、
ー、ホーイロホホホ、イホホ、ホへ
ーホイ、ロハーロイイイロイイーー
、ロハーロイロイイホ、ホへホニホ
ニニニハハロイハハニホニハニハ
ロハロイロハハハロイホホホーニハ
ハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハ、ハハハハハハハハロ
イハハニニホホニハ、イイイ、イイ
イ、イイイイイイイ、イイイ、

イイイイイイホホ、イイロイハハホ
イイ、ロハロハロハハホ○ホニホニ
ホ○ホニホニホ○ロロ|ロイ、ロイ
ホホへホニ、ニハロロ|ロイイ|ロホ
ホ、へホニニ|ニホニハロイハハニ
|ニ、ニハロ、ニハロ、ハロイ、ハ
ロイ、ニハロ、ㅍハロ、ハロイ、ハ
ロイ、ニハロ、ハロイ、ニハロ、ハ
ロイ、ロイホホニハ、ハ、ハ、ハハ
ハ、ハ、ハ、ハハハハ、ハ、ハ、ハ
ハ、ハハハハ、ハハハ|ハ|ハ
ロイハニホニハ、ロロ|ハヘトニニ

ニハロハロイホ、イロハハロイロイ
ホ、ホハロハホ、ホイロハホ、ホハ
ロハホホイロハホ、へへ、へへ、ニ
ニ、ニニ、へへ、へへ、ニニ、ニニ
、へ|ホニ、へ|ホニ|、ニニニニニ
ニニ、ハハハハ、ロロロ、ハハハ、ニ
ニニハハハハ、ロロロ、ハハハハ、ニ
ニニホホホ、へへへ、へへへ、ホ
ホホ、へへへ、へへ|チ、へへへ、ホ
ホホ、へへへホニ、ホへへへホニ、
へへへ、ニニニ、ハハハロイ、ロロ
ロ、ニニニ、ハハハロイ、ハハハ、

ニホホ、ハハハハ、ニホホ、ハハハ、
ハハハハ、ホヘホニ、ホヘホニ、ホ
ヘホニ、ホヘホニ、ホヘホニホヘホ
ニ、ホヘホニ、ホヘホニ、ホヘホニ
ハロハロイ、ヘホニニハロハハハロ
イ、ロハロイ、ロイホイホニ、ホホイ
ロロロ、ホロイホニハロイロイホ、
イホニハ、イイイ、イイイイイイ
イイイイホニホニホー、ロイホニ
ホ、ニホロイホホホニホホイイロイイ
ホニチヘホニホヘホニハロハロハー
ニホ、ロハハハ、ホニホニハ、ロー

ハーニホー、○ニホーホ、ホニホ
ーニハーロー、イロローニホロ、イロ
ーイホホニホヘーホイロハロハニ
ーハロイロイホヘーホニハ、ホロハ
ーー八、ハハハ、ハハロ、ロロロ、
ホニハハハロイホーニハホイー、ロ
イイ、ロイイイホホイロハ、ロハ
ーハハハー、ハロハニホホホニハロ
イ、ホーイロ、ーイホーハロハロハ
ハハニホーホホーイホホー、ホホ
ホホホニホニホイイイホハロハロハ
ハハハハ八、ヘヘヘヘホニニ

ヘヘヘホニ、ニニニハロ、ロハーロ　イ
ホ○ニニホイホーニハ、ホニホニホ
ホ、ニホーホニホホローイホ、ロハ
ニホーホニホーヘホホー、ホーイ
ーロハ、ロイホロイホニ、ハロハニ
ホヘーホニーハ、ニホホニハロイニ
ニハロロ、ーーロリホホホホホ、ホヘ
ーホニニホヘホイイロニハ、ロハニ
ホホホホホ。

○しほの山、さしでの磯に住む千鳥君が御代は八千代とぞな
く、君が御代は八千代こぞ嘯く、淡路島通ふ千鳥のなくこ
へに幾夜ねざめの須磨の關守、幾夜ねざめの須磨の關守

唱歌

○君が代

きみがよは　ちよにイホイロハロイ、ロハニハニ　やちよホニ
にさざれ、いしのハ、ロハニ、ーヘホヘー、ロハニハ　はホニ
なりてこけのロロハイー、ニホイー、ホイニハニ　むすうさ
ーロイー　で

○君が代は千代に八千代にさざれ石の巖となりて苔のむす
までに

○紀元節

くにそびゆるたかちほのもー　ホーホイリニハニホホホイニー、ホ
ーホイニニハロハハハニロー、イー　かねおろしにくさもまもなびきふしけんおをみよをイロ、ハ、ハ、ハ、ロ、イ、イ、イ、ホ、イー、ロー　ロぐわふこそたのしけれハイイホニハハニハロー

○雲に聳ゆる高千穗の高峯おろしに草も木もなびきふしけん
大御代を仰ぐけふこそたのしけれ

○金剛石

こんごうせき もろみがあすばたロロロニハーハロハハニニホー、イ
ーイホロロイイホホホニハー、ロー
ともまをびてのちにこそ まことと
ロロハハホホニニホホイー、ロロハ
のとくはあらわるれ とぴいの
ハイーホホイイイハロー、ロロロロ
はりのたねまなく めぐるがひ
ハーロイホホニロハー、ニニハハニ、
ときのまのひかげをし
ーホホイイイロホー、ロー ロロイイ
みてはげみなばいかなることも
ホホニニハニホー、ハハハロイーホ
おならざらん
ニハハニハロー

○金剛石も磨かずば玉の光はそわざらん人も學びて後にこそ
誠の德はあらはふれ時計の針のたへまなく廻るが如く時の
間の日かげ惜しみてはげみなはいかなる事かならざらん

○皇御國

すめらみくにのもののふは
イーイホイイロロハハニハロー、ロ
かなることをかつとむべき
ロハハニニハロイイイホイー、ニニ
みにもてるまごころを
ホホハーロハニニハロニー、ホーホ
とおやとにつくすべし
ニハハロハニニハロイー

○皇御國の武士は、いかなる事をかつとひべき たゞ身にも
てる眞心を君と親とに盡すべし

○數へうた

ひとつとや ところは
ニニホニホーホイ、ロロイイホホニ
だいいちよー だいいちよはげみ
ホイイホニハーイイホニハ、ロハニ
てっとめてよをわたれ よをわ
ニハロイホロロハロハーニハロロハ
たれ
ロハー、

○一つとや人の心はだい一よ、だい一よ、勉めてはげみて世
をわたれ世をわたれ、

○螢の光り

ハホーホホロイーホイロホホロハ
ニー、ニハーロロホイーホイ、ロホーニ
ニハホー、ニハハロロホイィホーニハ
ーロロハニー、ニハハロロホイイホイ
ロホニニハホー。

○螢の光り窓の雪、ふみよむ月日重ねつゝ、いつしか年もすぎのとそ、あけてぞ今朝は別れ行く。

○舟遊び

ホーホロ、イーホイロ、ハーニハロイ
ー、ロロハイイホニニハホー
イーホイロロハハニーハロニハー、
ハハニニハーロロ、イイロイホー

○風と波とに送られて夏もすゞしき舟のうち、笑顔すゞしき松島はやわが前は迎ふなり

○四千餘萬

ホホイイハハハ、ニニハハロロイホ
ホホイホニニハ、ホーニハロロイホ
ホホイイハハハ、ニニハハロロイホ
ホホイホニニハ、ホーニハロロイホ

○四千余萬あにおとともよ、守りに守れ君が代を玉にもまさる心の光り、みがきにみがけたゆみなく
我らが友は心をあはせ、はげみてつとめ君のため、やがては國のいしづへとなりては後に名をのこせ
そとにはわだを防ぎて國の光を廣くは我等なる情はくだけて身をそゝぐもつくせやつくせ國のため

明清樂

○九連環

ホーホロイ、ローハニニホイロホニ
ハーハ、ホーホハニーニハニホニホ
ニハホニハー、ニハロイホイホ。

○算命曲

ホイロハロロハロホイロイ、イハ
ロロホイロイ、ニホヘホニハニハ、
ハホヘホニハニハ、

○四季曲

ホローイロニホイーーロイ、ホロー
イロニホホニハーホーイロハーロ

ロー、ホーローイロニホイーイロイ
ー、ホホロロイロニホホニハー、ニ
ホニハロローイロローイロハハニハロイ
ホホホイホー、

○末梨花

ロロハニホニハニニ、ロロハニホニ
ハ五ハ、ロハロハニホニハ、ロイロ
ハロイホイホ、ロイイホイホイロハ
、ニハニハロイロハイハロイホホ。

ニホイイホイロホニハイハロイホホ
、ニホイイホイ ホニハニハ、ロイ
ホイホイロハニハニハロイロハイ

ホイホイロハ、ニハニハロイロハイ
ハロイホホ、ニホイーホイロホニハ
ニハー、

○沙窓

ハーハーロイイホー、ニホヘホニホ
ハニハ、ロロハロイホイロイ、ニホ
ヘホニホハニハ、ニニハニニハニホ
ニハロハニホニハ、ホイローイーホ
ニ、ホイローイーホニホハニハー。

○剪々花

ニニハニハニニハニ、イホイロホ、
ニハホヘホニホハハハニハ、ホホー

ニハロハハ、イイホイロハハニハロ
イホ、ホイホイホニハ、ハロハニホ
ニハ、ホニハロイホ、イホイロハハ
ハロイロハハ、

○漫波流水

イーイロハーハニホーハニホーホ、
イーイロハーハニホーハニホーホ
ニホハーローハ、イホイロハニハ
イロハハニハロイホホハニホーホ、
イホイロハーハニホーハニホーホ、
ニホハーローハ、イホイロハニハ、
イニハーニハロイホホハニホーホ、

イホイロハーハニホーハニホーホ、
ホホハニホーホ、ロイホーイハロロ
ロロイロー イロハ、ニハロイホホハ
ニホーホ、イホイロハーハニホーハ
ニホーホ、ニホハーロー八、イホイ
ロハニハ、イロハニハロイホホハ
ニホーホ、イホイロハーハニホーハ
ニホーホ、ホホハニホーホ、ロイホ
ーハホニハニーハニホ、ニホニ
ハロー ロー ハニハイホイロハニハイ
ロハハニハロイホホハニホーホ、

○梅花流水

ハニニハニホー、イホイロハホハイ
ハホハニホー、ニハニホイー、ロハ
ロイホホホ、イホイロハー、イハイ
ハイロハロハロハロロロハハイホ
ホホハイハイハロ、ホイホイロロハ
ハロハロイホホホハイホイロハホ、
イハホハニホー、ハニホホニハハハ
ニハニハ、ホイホイホイロハロハロ
ハニニニハニホホハホイホニハー、

ハハハニニハニニハ、ニホニハロ
ハロイニニニ、イロイロハハハ、ロ
イロイハハハ、ニハロイホホホハニ

ホハニホー、イホイロハホハイハホ
ハニホー、ニハニホイー、ロハロイ
ホホホハイホイロハーイハイハイ
ロハ、ロハロハロロロハロイホホ
ホハイハイハロ、ホイホイロロハハ
ロハロイホホホハイホイロハホハイ
ハホハニホー、ハニホホニハハハニ
ハニハホホイホイホイロハロハロハ
ニニニハニホホハホイホニΔー、ハ
ハハ、ニニハニニハ、ニホニハロハ
ロイニニニ、イロイロハハハ、ロイ
ロイハハハ、ニハロイホホホハニホ

ハニホーホ、

○權兵衛が種まく

ロハロイホホニホ。ロハロイ
ホホニホロハロイホホニホ
ロハロイホホニホ。ニホホニ
ホホニホホハヘホホホニロ
ハ。
ロハロイホホニホ。ロハロイ
ホホニホ。ロハロイホホニホ
ロハロイホホニホ、ロハロイ
ホホニホロハロイホホニホ

ニホホニホホニホホハヘホホ
ホニロハ

○權兵衛が種まく

ごんべが種まく烏がほせくる、
三度に一度はそわすばなるまい
すんべら〳〵よ。
阿ふの小山のこまつのかげから
十六しまだが出てきて小招く
三度に一度は行かすばなるまい
すんべら〳〵よ。

○松山流水

ハニホホハニホーニホハロハホニ
ハニイイー、イイイハロロハロイ
ハー、ハニホホハニハー、ニホハロ
ハホニーホホホイイイホイホ
ニハハハニハニハー、ホニハニイ
イー、イイロハロイホホホイホイホ
ー、ハニホホニハハハニハニハー
ホニハニイイー、イイイハロロロ、
ロハロイホホホイホイホーニホハ
ロハホニハニイイー、イイイハロロ

ロハロイホー、ハニホホハニホー
ニホハロハホニーホホホホイイイ
イホイホイニハハハニハー、ホ
ニハニイイー、イロハロイホホホ
イホイホー、ハニホホニハハハニハ
ニハーホニハニイイーイイイハ
ロロロハロハロイホホホイホイホー

尺八獨稽古

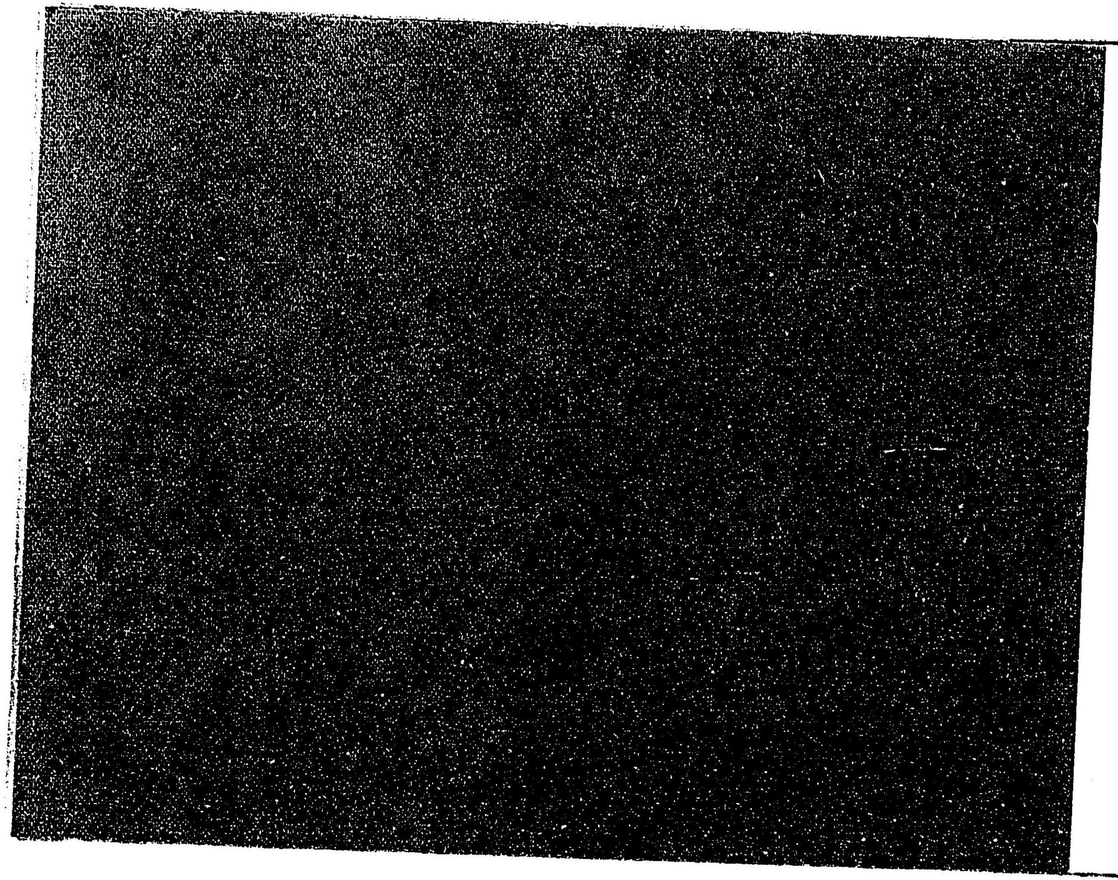
明治四十三年八月　千　日印刷
明治四十三年八月十五日發行

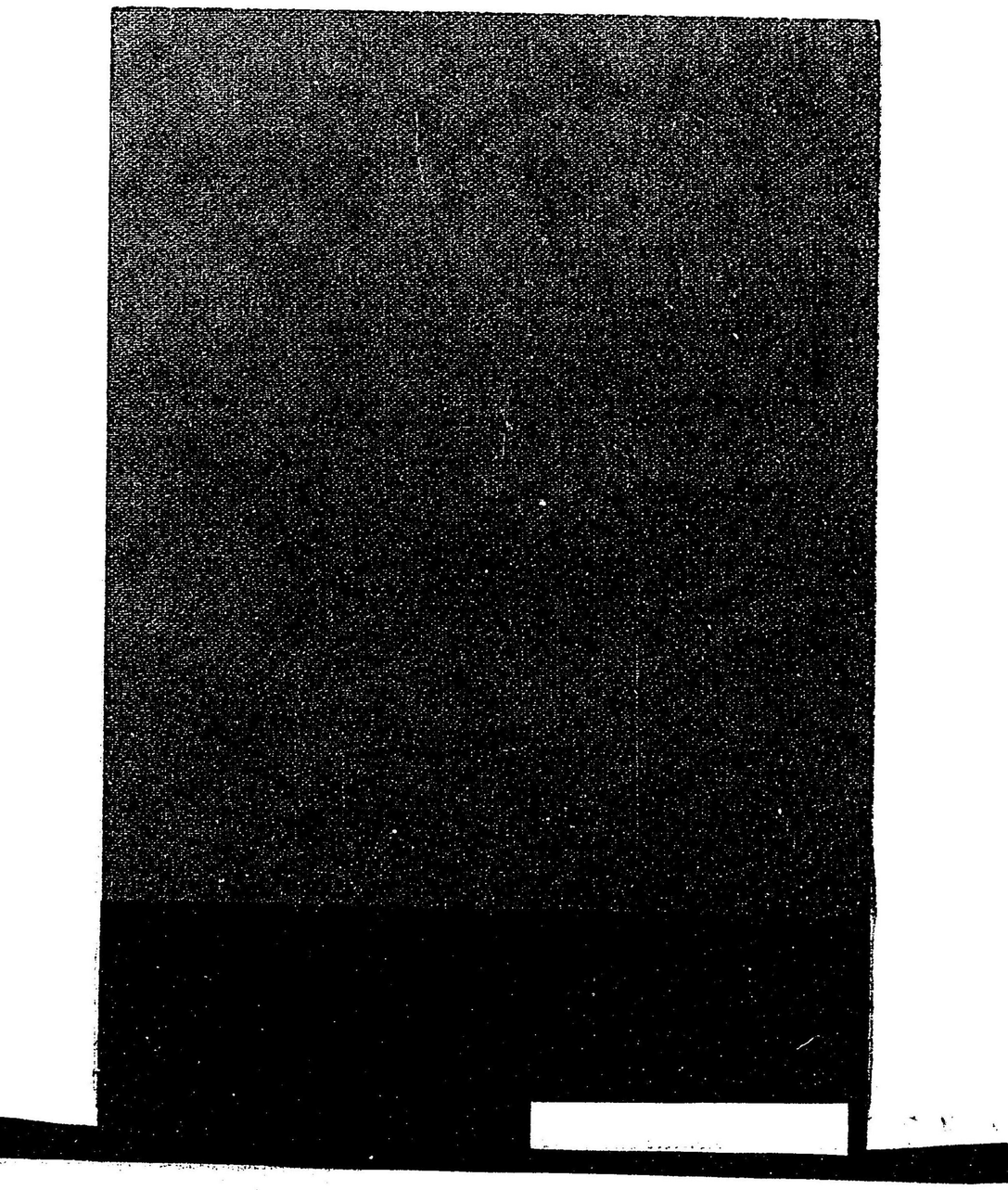
不許複製

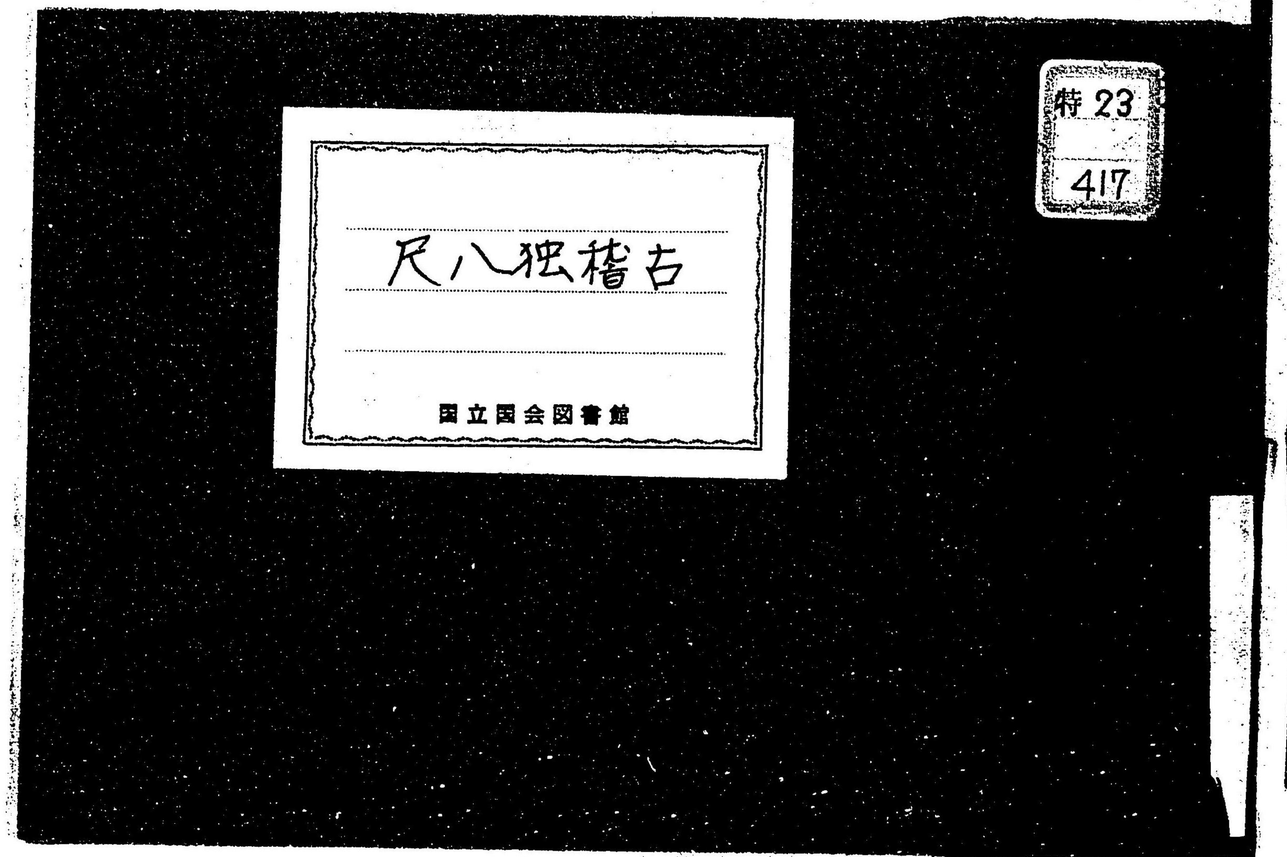
著者　桂花散人
大阪市東區博勞町四丁目三番地
發行者　立川熊次郎
大阪市東區博勞町二丁目一番地
印刷者　蒲田德之助

大阪市東區心齋橋筋博勞町
立川文明堂

大阪市四ッ橋南詰
岡本增進堂





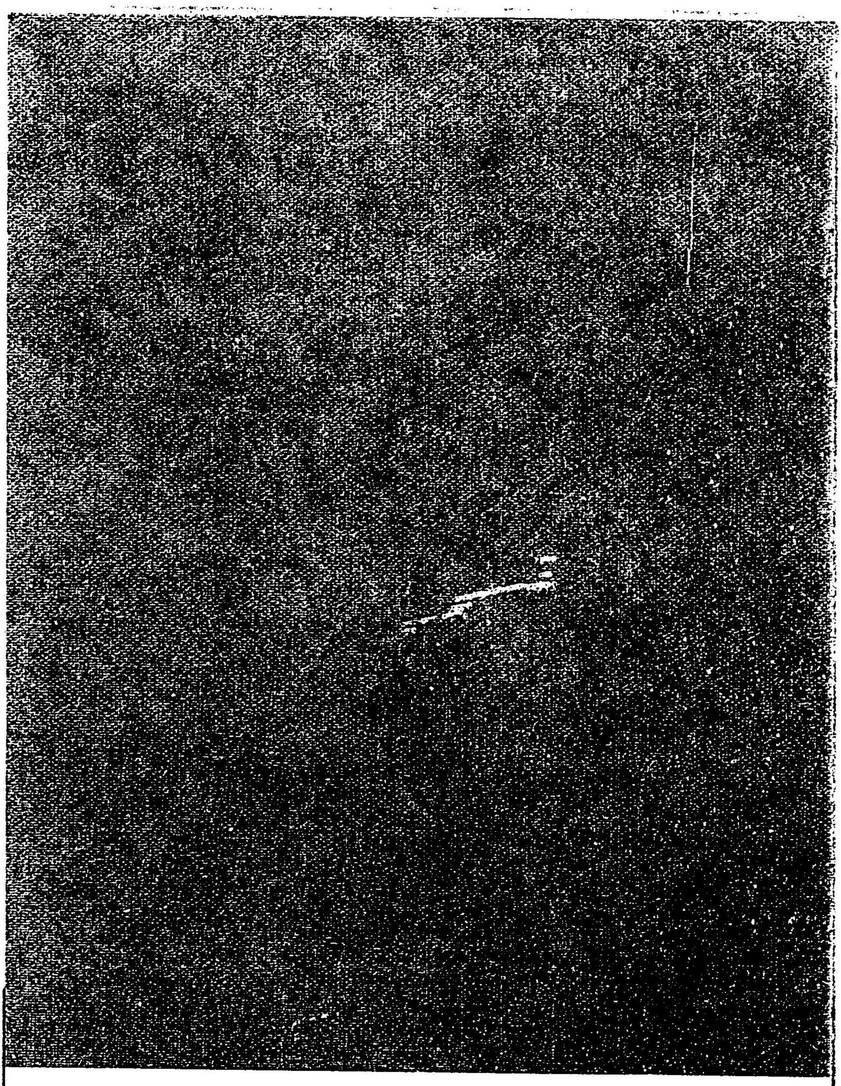


074495-000-7

特23-417

尺八独稽古

野田　桂華／編

M43

CEI-1811